特63
458

を書きあつめて、人のさまざまの心がまへありしにはあんこの心がまへありしにはあらせて書きもてゆく内、彼も戀、此も戀、高き山頂にまかはなかりしを、纏めて一冊子高き山頂にまかはなかりしを、纏めて一冊子となり。戀愛小説を離する聲の高き山頂にまかはなかりしを、纏めて一冊子編を公にするは、これも世に添へていふ卷中失戀の主人公多き戀ぜたる男のしわざなるを。

は、必ずしも我をうたひたるに

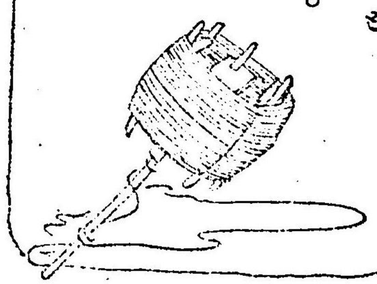
はあらすかし親しき友の花袋子は、此の集に題して

花はみな藤も櫻も山吹も
かへらぬ水の上にちりつゝ
朧夜の花のもとにて夢みてん
むかしの戀のかげや見ゆると

と詠じたりぬ。まことに夫れなりけり。

戀の品川山下庵にて

花の三月　水蔭しるす



戀

目次

海賊の戀……一頁
書師の戀……一三七
鐵夫の戀……二〇四
炭燒の戀……二四一
花守の戀……二六三

戀の舟出……二七一
戀の長屋……二九五
戀の小川……三〇〇

戀の樹蔭……三一三
戀の朝顔……三一七
戀の白蓮……三二〇
戀の七夕……三二三
戀の盆踊……三二七

水

峠の水……三三〇
氷室の水……三三二
岩上の水……三三四
御手洗の水……三三八
岩屋の水……三四〇

神木の水……三四一

火

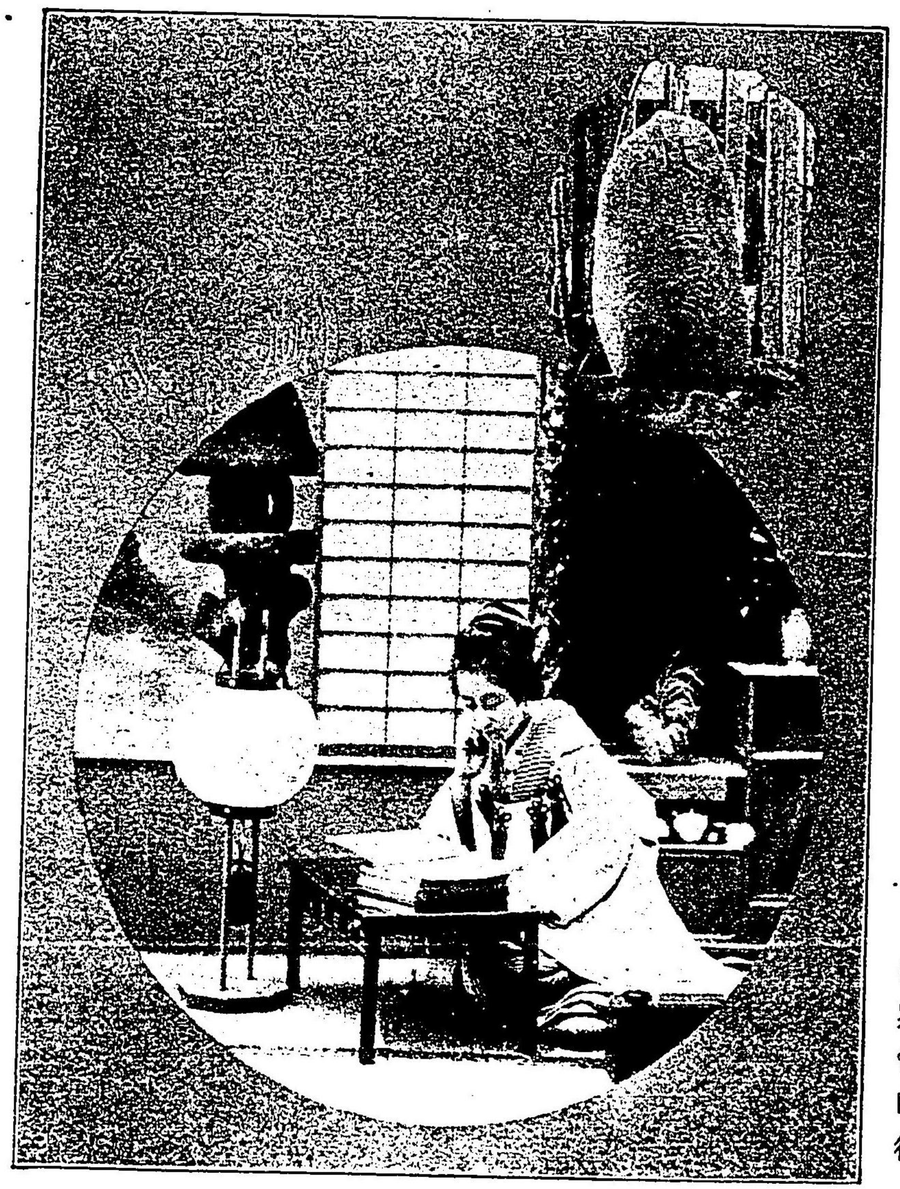
火中大王……三四三
子供の焚火……三四九
對岸の燈火……三五一
山火事……三五二

人

雪の旅人……三五六
槍木笠……三五八
沖の白鳴……三六〇

目次

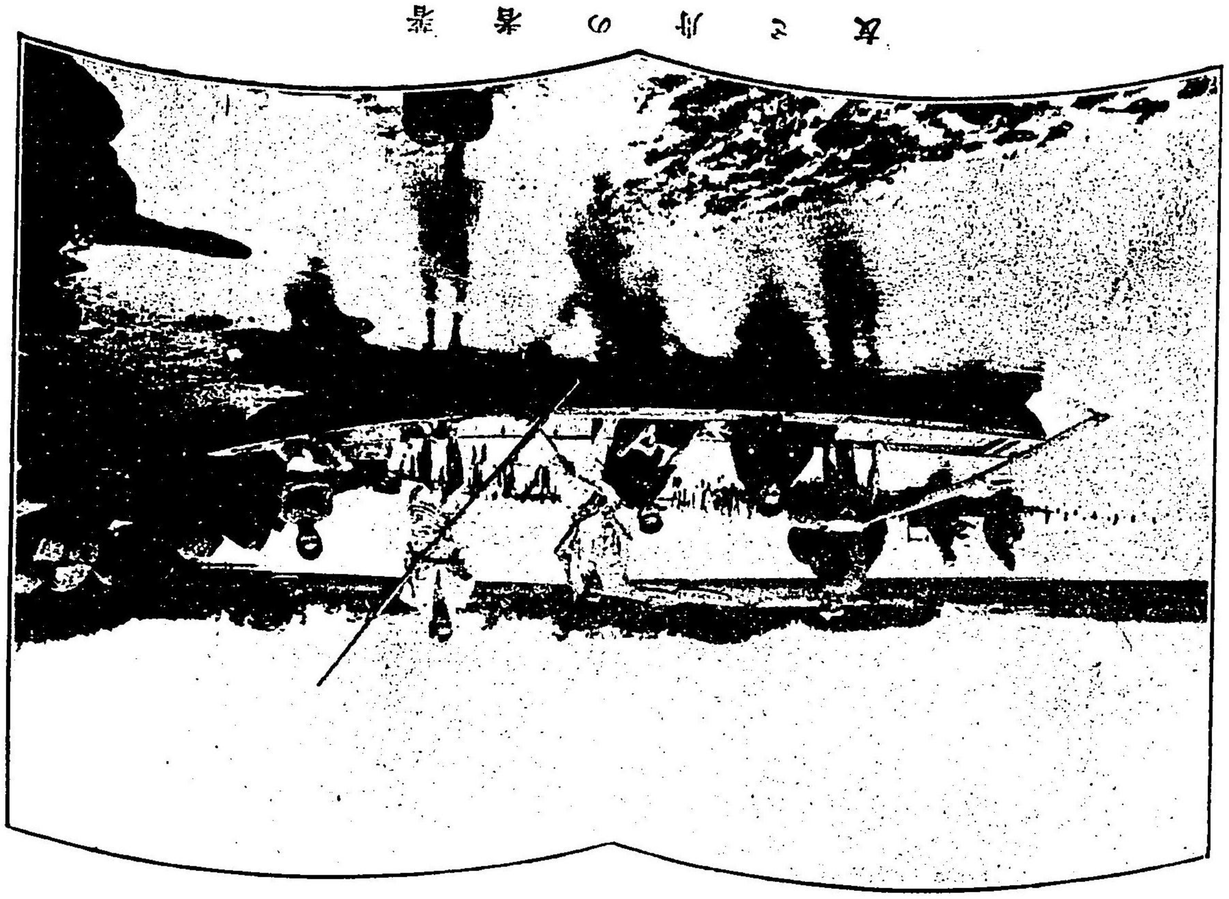
勢子揃……三六一
殘る一人……三六二
別れの袖……三六四
蚤……三六四
蛇……三七四
蛙……三七五
鰕……三七六
鮑……三七七



戀の名殘の比翼塚

猶興舍印行

技術の報酬と懸



友と舟の者等

春過ぎて夏は來ぬけり

戀 海賊の戀（二）

夜泊 江見水蔭

大島はづれの暴風は相摸灘に荒狂うて、名殘は此所に逗子の入江、日頃は鏡の面の如き靜けさも、打つて變つた大浪の、岸に碎ける其上から其上から、折重なつて寄來るに、追詰められた漁船七八艘。御最期川の川口から溯つて、一曲り、二曲り、其處の枯蘆の間に艇を突入れ、一トち

ちみに縮まつて居る艫の方には、小川も大海に劣らぬ怒濤突來り、此所も彼所に讓らぬ强風吹來り、苫も蘆も同じ樣に搔拐つて、蘆間の水鳥、扨は船中の漁夫、それ等の骨の髓まで濡らさうとはして居る。

この船は當地のではあらぬ。沖釣に出て俄爾の暴浪に、行當りばッたり漕着けたもので、我家は遠し、知人は稀なり、米塩はあれども、不漁の事とて、金錢なら穴の開いたのさへ無く、宿を取る事も酒を買ふ事も出來ぬ儘に、この風雨にも陸へ上らず、苫を張り、帆を掛け、狹き胴の間の板の上に、曾て釣上げた鮪の形を學んで、ごろ〳〵と五六人、足と頭と相混じて、さァ斯うならば寢るより他は無いので。

彼等が皆眠つて居る內に、日は暮れて、雨だけは止んだれど、風は收まらず。折しも十日の月が、寸裂れて飛んで又結ばれながら走る雲の間から、切れ〳〵に光を放ち出したが、岸に沿ふ家々には、これも晝間から戶を締めた儘で、燈火一點見る事が出來ぬ。

西の岸の蘆間に居る一艘の漁船、其苫を押開いて突如顏を出したのは、百日鬣のやうな髮の毛の、櫛にもブラッシにも横には倒れぬと言ひ氣の强さ、恐らくは生地も見えぬ濃さ黑さでがな。額は廣く、横に一うねりの皺があれど、年齡は未だ三十と二ッか三ッか。月を得て光る眼か、寒さに結ぶ口か。光る眼は四邊を見廻して後月に向ひ、結んだる口を此時開いて。

「出なくッても好いのに、月の馬鹿が。それよりは風が止めば助かるものを」

斯く言ひながら、熊の穴を出るが如く、苫の割目から肩をゆり出す時、襟元へ枯蘆から軍を落されて。

「えッ首を斬られたかと思つたわい」

と諧く途端、苫の下から惡戲する者のあつたのか。

「ちよッ誰だ、我の臑の毛を拐る奴は。上下から攻められちやァ耐らね

え」

苫の下から一人の聲。

「權藏、お前は何しに起きたのだ」

「誰だと思つたら、悪戯を仕やァがッたのは平六だな。他の奴等は高鼾で寢て居るのに、能く手前一人眼が覺めたな。こう、好いあんばいに雨だけは止んだぜ。此樣子なら翌日の朝は凪かも知れねえ。此方が寢坊をして居る内に、他の船は皆出て行つて仕まつた、汐までが引いて行つて仕まつて、干潟の洲の上へ此方の船が唯一箇、置去にされて居るなんざァあんまり好いものでねえから、これから替り番子に起きて居やうぢやァねえか」

「むゝ、それが好い。まァお前から先きへ始めねえ」

「えい、巫山戯た奴が蹴飛ばすぞ」

「待ちねえ、其處には源太が寢て居るのだ。粗末な顏のこせえ方だから、あまり酷く蹴んなさんな。こわれるかも知れねえ」

「馬鹿が。今戸燒の貯金玉ぢやァあるめえし」

「但し未だ其奴には入れてねえから、逆樣にしても附木を差込んでも、一文も出る奴ぢやァねえ。こわしても無駄だからの」

「洒落るのは止して呉れ、我は最う大きらひだ。それよりか平六、まァ空模樣を見て呉れ、我にはちッと分らない處がある」

「ど、ど、我の鼻の穴が上を向いて居るからッて、天文係は恐れるが」

言ひつゝ又一人苫から首を出した。誠に鼻は眼鏡の如く、上を向いて開いて居る。

眼なら口なら並尋常の形をして居ながら、それを悪く滑稽の相に見せしめるとは、當人の身に取りて如何ばかり口惜しい鼻であらうか。

「おう、成程な、月が出て居る、此風向きでは翌日の朝は好いだらう。いや、何んにしても今日は酷い暴風だッた。すんでの事で命を捨てる

處よなァ」

「それで我は思當つた事がある。今更擔ぐ譯ぢやァないけれど、二三年前に此逗子の海で人の命を助けてやッた事があつたが、今日幸ひに暴風を避けて、此逗子へ漕着けたといふのも、おい、平六、不思議な緣と言ひてえぢやァないか」

「權藏、大分眞面目な聲だの。お前のやうな男でも、人の命を助けた事があるのかい。へえ、これァ面白い。へえ、如何して助けた、聽きてえものだ」

「我が夜叉ではあるめえし、人を助けたッて何んの不思議があるものか。和主が女に惚れられたと言へば、それこそ珍らしい話だけれど」

權藏は斯く言ひて、冷やかに平六を見た。

「まァ好い、何んとでも言ひねえ。それ處ぢやァねえ、翌日の天氣が變るかも知れぬ話だ。聽かして呉んねえ、如何して助けたのだ、え、珍

らしい話ぢやァねえか。皆目が覺めて居れば好いな。此話を聽かして遣るものを。此奴ァ一番起してやらうか」

と平六は、わざとらしく苦の下に藻潛らうとするのを、ぐッと手を延ばして首筋を攫んで。

「やい、馬鹿、止せよ、平六。我が人を助けたからッて、翌日雨が降るものなら、それァ三年前の事だから、最う遠くの昔濟んで居るのだ。折角見込んだ翌日の天氣に、ケチを附けると捻り殺すぞ」

「ちよッと待つた、又喉を絞めるのは。然う仕なくッても咳が出て苦しい所だ。扨て串戲も此邊で切上げて、本統にお前、人を助けたのか」

「嘘言は語らねえ、まァ聽けよ。和主も知つて居やうが、夏場の逗子と來ちやァ中々の繁昌で、都も及ばねえ程の賑やかさ。海邊の別莊も、山の上の別莊も、東京や横濱の奴等で一杯に爲つて、其奴等が又ぞろぞろと、それ、あの、海水浴を仕やァがる」

「むゝ、それァ我も知つて居る……」

「其海水浴をして居る中に、十四五の娘だ、それァ如何も可愛らしい、我には唯最う何んとも言へぬ美しい女の子が……けれども、色は黒かつたよ」

「一寸待つた、其色の黒いのは、海邊へ來て日に焦けましたので、なに、お前さん、東京へ歸れば、ぢき元の雪の膚とかへりますよ。へえ、それァ決して仲人口で申すのでは御座いません。何んなら當人を召連れまして……」

「えッ何を言ッてやァがるのだ。まァ聽け、まぜッかへすと酷いぞ」

「あいよ、それから……」

「それが如何した期會か、うたりに引かれて、沖の方へ流された。あれあれとぼちや〳〵、連中が騷いだけれど、誰助けやうとする者がないわ」

「分つた、其處をお前が來合せて、浴衣の儘で飛込んで、扳手を切つて

泳ぎ着いて、何んの苦もなく助けると、それ、向ふが水泳の道を知らないから、やれ嬉しやと取縋つて、去やにむにお前に抱着くといふものだ。斯うなると心得のある者でも、手足の自由を失なつて、共にぶく〳〵、ぶくを遣る。我なら其の儘沈んで仕まつても好いな」

「馬鹿ッ、默つて我の話すのを聽け」

「あいよ、それから」

「和主の言かした通り、全く困つた。ちよいと肩へ手を掛けてさへ呉れれば、向ふも沈まず、我も浮かんで、樂に泳いで歸られるのだが、手足の働きが出來ぬものだから、すんでの事で鹹い水を呑む所さ。えい、多寡が逗子の入海だ、女の子一人助けられねえで、この我が如何するものかと、兩手で其娘を水の上へ指上げると、此方の身は忽ちにして沈んだ。幸ひ深サも我の頭の上から五六寸といふ處だッたから、上の重みで足も浮かず。水牛が海の底を行くやうに、のそり〳〵淺い方へ

歩いて行つたが、陸から見たのに娘一人で、浪の上に立つて居るやうであつたさうだ。あッはッはッはッ」

「ふむ、其奴ァ大出來だッたが、其娘は全體何家のだッたい」

「えい、もァ默ッて聽けよ。話はこれからだ」

「何んにしても外は寒い、又寢轉んで聽くと仕やうか」

「贅澤を言ふな、何事も我慢だ。聽け、それから斯うなのだ」

風を形で見せたらばと思はれるやうな雲の飛散。空に斷られる十日の月は、水の上にも碎かれつゞけて、漸く小壺の裏山の方に傾きかけた。

權藏は平六の少しくだれ氣味に爲つて居るのも構はず、語りかけた話を次ぎて。

「助けたのは貴族院の議員とやらの、飯島とかいふ人の令嬢で、養神亭の客ださうだ。娘が潮にさらはれたといふので、あわてゝ飛出した親

父に母親。濱邊の砂利の上でまご〳〵して居る處へ、我が無事に連れて戻つたものだから、大喜びで……」

「それァ大喜びに違ひねえ」

「其大喜びは分つて居るが、助けた我を打遣つておいて娘を取捕へて夢中だ。死んだものが助かつたやうにといふが、全く其通りの次第だから、喜んだ事は一通りでねえ。それもまァ好いとして、助けられた娘ばかりいつまでも〳〵構やァがつて、助けた我樣を丸で忘れて居やァがる。が、まァこれも好いと仕て、親子の情だ、ま、仕方がねえとして、助けた我の手持無沙汰で立つて居るのに、やつと氣が着きやァがッた其時にだ。おう、お前が何か孃を救うて呉れたのかと、親父の佛頂面がさも〳〵えらさうに言かしやァがる」

「仕方がねえ先きは貴族院議員だ」

「貴族院議員が如何した……そんな身分のものならば、漁師船頭とは

譯が違ふわ。いくらか物の言ひやう禮の仕方ぐれいは知つて居さうなものだが。まァ聽きねえ、自分の大事な娘を命掛で人に助けさせておきながら、洋犬が池の中へ飛込んで、主人が投げた杖を嚙へて來た程にも思やァがらねえで、我の娘の溺死しかけて居るのを助けるのは、和主等の義務だと言はぬばかりに、頭一寸下げるでなく、突然五圓紙幣を一枚出して、さァこれを持ッて行け……」

「好いぢやァねえか、我ならば此方からぴよこ〳〵御辭儀をして、有難く頂戴するな」

「和主は取るか。我は取らねえ。考へて見ろ、其處まで人間の株が下落して居ると彼奴は思つて居るのか、我を其株の一枚と見くびれァがッたのか、人間は金錢さへ見せれば、それで好いものと思ッてけつかるのか。彼奴の前へ出る奴は金錢で動く奴ばかりだから、我も亦金錢で如何にもなる奴と思やァがッたのか。我ァそれが癪に觸るのだ。それで直ぐと其紙幣を、地の上へたゝきつけてやつた」

「やれ〳〵惜しい事だ」

「すると親父奴――これでは少ないのか、と言やァがッた」

「向ふは分ッてらァ」

「見くびんなさんな、金錢で人の命は助けねえ。恩を鼻に掛けるぢやァねえが、お前の身分が何んであらうと、我の職業が何んであらうと、娘に取ッちやァ命の親だ。それ相當の禮をのべるのが理道ぢやァねえか。全躰此方等をあんまり見下げ過ぎて居るから起ッた事だと、さんざんたんかを切つて、其儘不意と行つてやッた。馬鹿にして居やァがる、あんな事なら彼の娘を、殺した方が好かッたのに。いや陰德あれば何んとやら、今度の暴浪に助かッたのも、其陽報かも知れねえ事だ」

「お前がそんな事を言ふやうに爲ッちやァ、最う餘程曲ッて居るぜ。未だ箍のゆるむ年齡でもねえのに」

「いや久し振りで逗子へ來たから、其時の事をつひ思ひ出して……」
「だが不思議さね。向ふの出方が氣に入らねえで、五圓紙幣をたゝき返へした、それ程立派なお前がよ。海賊をするとは、ちと可笑い」
「大きな聲で海賊呼はり、聽く者が無えとも限らねえ」
一方に平六を制しながら、權藏は川面より蘆間、ぎろりとした眼で見廻はして。
「海賊を働くには、それだけの又腹があらァ」
其又腹を聽かされる内には、全く風邪を引きますから、此處いらで御免を蒙りまして、お先へ寢みまするで御座りやすよ」
と言ひつゝ平六、苫の下に首を縮めんとする時。
「海賊供!!! 神妙にしろ」
何處やらで叫んだ。
けれども一向驚かぬ。聲の主は知れて居るので、權藏は又怒鳴りかへし

た。
「やい源太。又大聲で海賊呼はり、止せよ、おどかしは」
「おどかしは止すから、和主も大聲で話すのを止せ。お影で殘らずの者の眼が覺めたのだ」
と苫の下から異なつた聲で言つた。
「眼が覺めたら恰始いゝ、翌日は天氣だ、出立ときめるのだ。風の落ちるのを待つて船を出すのに、出しおくれては癪に觸るから、替り番子に起きて居やうぜ」
「それも皆聽いて居て承知だが。起きて居るのにまア此樣だ。苫はづれの雨戸に、ぐッすり濕めッた筒袖さへ、薪が無えので乾されぬ始末ぢやア、全く以て起きて居ても心細いや。まア權藏も平六も、一寸面を此所へあつめろ、相談があるから」
「又何か案じ出したな。碌な事ぢやあるめえ」

と言ひながら苫の下へ權藏首を入れる其前に、如才なく平六は引下つて轉がッて居る。

「何んだ、本統だ、與八も三平も起きてけつかる。さァ源太、何事だい」

「他ぢやァねえ、寒いから一杯呑みに行かうといふので」

「此夜更に何處へ行く。海賊が一文無しといふのも可笑な譯だが、三浦を廻はつてから生憎に、未だ好い鳥がかゝらぬ内、それ、晝間の大暴浪だ。錢も無えのに蹈出せるものか」

「其處を蹈出さうとするので相談だ。與八と三平とは纏まつて居るのだが、お前達二人が未だ分らねえから、それで今我から切出すのだ。如何だ、權に平よ、今夜だけ海賊を止して、山賊と出掛けようぢやァねえか」

「山賊？そんな深い山は逗子には無えぜ」

「なに矢張此邊で働くのよ」

「ちやァ山賊ぢやァねえ」

「見掛けた山があるから矢張山賊だ。何しろ、霜解道に敷いた炭俵を見たやうな下へ、小くなつて縮まつて居るにも當らねえ。此近邊にはいくらも好い家が並んで居るから」

「それ、妙、至極結構だ。どれ、行くべい」

平六は一も二もなく賛成した。

權藏は如何。腕を組んで考へて居る——其肩を撲るやうにして動かすのは源太で。

「如何だ、行かねえか。え、行くが好いぢやァねえか」

權藏は腕組を解いて。

「行くのは行くが、陸で稼ぐのはあまり好ましくねえ。行くのは行くが、酒だけにしろ。金錢其他に手を着けるな」

「又はじめやァがッた、如何でも好いぢやァねえか、鍵に二手があるも

のか。海でも陸でも同じぢやァねえか」

「此所で又お前と言合うてもつまらねえ。だから我は酒を呑みに行くだけなら行くと言ふより他には、相談に乗られねえのだ」

「えい、仕方がねえ。又始まッたのだ。それなら勝手にしろと言ふ處だが、生死俱にと盟つた五人組だ。お前一人船へ殘して、四人で稼ぎにも行かれめえ。ぢやァ酒だけ呑みに出掛けると仕やう」

三平と言ふのが口を出して。

「然う極まつたら、なるべく酒の好さそうな家へ這入らうぜ」

與八と言ふのも。

「田舍家の濁酒よりは、別莊の菰冠りが目當だ」

平六も。

「別莊々々、別莊なら大概一軒立で、世間に遠いから家の者が騒いでも、外へ知れなくッて好い。醉つて來たら少々位、都々くッても構はねえや」

權藏から〳〵と此時笑つて。

「冬場の別莊は空家が多い、人が居ねえ處へ這入ッちやァ酒は無えぞ。人が居る内でも下戸が住んで居ちやァ駄目だ」

「然うなれば米飯を食ふ」

と平六が突込むだ。

「なァに其處は源太だ、晝間にちやんと見立ておいた家があるのだ」

ための板を脱せば、此所に五本の長脇差。これをぶッこんで岸へ飛上る、源太、與八、平六、三平、權藏。

源太は四十二三、眼窪み、鼻反り、口大きく、髯延びたり。此組での年長、與八に三平は二十四五の血氣盛り。惡黨面のいづれも並んだ中に平六は甘相、權藏は苦い顔。

《一》 酒盗人

御最期川から遠くもなき西岸の小松原の中に、砂地ながら廣々と庭を取つて、別莊並みの風流を氣取つた一軒家。茅葺屋根の勾配が思切つて急に造つてあるのは、海邊に近いだけに嵐を氣遣ふた故であらうが、月を背にしての夜の目には、ナイル河畔の三角塔の畫を見るやうで、砂原だけに埃及の地も斯くやと思はれる、此所へ、五人の人影はばら〳〵と小松の蔭から現はれて來た。後からも亦七八人、續いて踏出し掛けて、進まず、唯動いてばかり居る其正體は、人の丈と同じ程の小松の枝が、今飛出した男供の、袖に觸れた餘動に他ならぬ。

裏手には井戸の端を搔廻して居る竹釣瓶の音響、運動場には鞦韆の環が喰違ふて發する奇聲、扨は雨戸を彈く手拭掛の音、これ皆晝間からの風の未だ落ちぬのを、松と浪とを外にして報じて居るのだ。

「此所へ出たのでやッと安心だ。如何も松原を潛り廻はるので、顏中チク〳〵松葉で刺れて……」

これは平六の聲だ。

「如何して安心が出來るものか。此所へ出れァ此所へ出て、我は眼の中へ砂を吹込まれた。月夜でも我ばかりは闇だ」

これは與八の聲だ。

「何しろ這入つて仕まふまでは、靜かにして居ろ」

制するのは源太。三平に權藏は無言。

何處が夜討の攻口に適して居るかと、二三遍ぐる〳〵と家の四面を廻はつて、矢張元の座敷の庭に納まつて。

「如何も海とは勝手が違つて、餘程這入るのに骨が折れる」

とは源太の嘆息。

「多寡が酒泥棒に、五人の男が此姿だ。影法師を見ると愛憎が盡きる

ぜ」

とは權藏の述懷。

「月夜に酒泥棒とは聞かねえ事だ。はゝゝゝ先々月の十五夜と來ると、豆を盜みに畑でまごつく奴だが」

とは三平が冷評。それを打消すのは與八で。

「でも這んな風體でまごつきもしめえ。逗子には悪い狐が居るといふ事だが、何んだが薄氣味が好くねえ」

「馬鹿な、泥棒が狐を恐れる奴があるものか。本來なら犬を嫌ふ筈だのに」

と源太は叱する。

「居なくッてほんとに好いのう、吠えられると往生だ」

とは平六の弱い音。

「何しろぐず〳〵仕ては居られねえ、其所の庭石を持つて來て雨戸へ撲きつけろ」

破壞的の言葉を放つたのは權藏だ。平六はこれに肝を潰して。

「だッて近所へ響いて、知れたら如何する」

「此風の最中だ、構ふものか」

「家の者の眼が覺めたら」

「其所は大刀を持つて居る五人强盜だ。如何でこそ〳〵を働くのとは違ふわ」

と言ひ捨て權藏、抱き頃の庭石を、喰込んで居る芝の中から引起して、發矢とばかり雨戸へ投付ける、後から續いて又一ッ源太が投げる。平六は鐵の手洗鉢を投げやうとして、三平と與八の頭から水をぶッかけ、飛んだどぢを組んでまごつく内には、一枚の雨戸は、碎けたのか、破れたのか、飛んで倒れて入口が開いて居る。そして權藏も見えぬ、源太も見えぬ。最う二人此所から闖入したのであらう。

雲は月を呑んだ儘で山の端に到頭入つて仕まつた。源太と權藏が打破つた雨戸の一枚、風は砂を捲いて此所から吹込むに連れて、三平に與八はずか〳〵と侵入した。平六は一人張番に殘つた。

これからの闇に平六唯一人、他には最早や誰も庭に居らぬ。ごろすけごう〳〵と梟の鳴き聲が、遠くに近くに聽えるのを、相變らず風の音が搔消すばかりで、空に雁の群の往來さへ無し。

此時に方つて、今まで暗かつた家の中は、俄に燈火の光明かに照らし出して、靜まりかへつて居たのが、足音やら、戸を開く音やら、若き女の泣聲、年寄の嗄く聲、四人の白浪がのゝしる聲。

それが漸く收まつた頃には、臺所の方が閙扇で煽ぐ音、炭の跳ねる音、皿鉢の相觸れて鳴るやら、呑口を拔いてどく〳〵と酒の出る響きやら。

最早やこれまでと平六も、我慢の綱を切つた荒馬の形、飛込んで見れば十疊の座敷、此所へ茶の間から長火鉢を運んで、櫻炭を山盛積んで、青

い火の燃えるまで赫々と熾して、これを取圍んだるは、源太、權藏、三平。與八の勝手の方に眼張つて居るのは、寮番らしい老爺と、中働きらしい女中とが、腰繩の儘で御馳走の支度をして居る、それの指揮やら、逃げられぬ用心やらで、片手に無暗と脇差を捻くりながら、恐ろしい眼で睨み着けて居ても、先程の砂が未だ瞳をつゝく痛さに、ぽろり〳〵と時々涙をこぼすので、ねッから凄味が拔けて見えた。

「何んだ、家内はこれだけか」

訝しさに平六が先づ問ふた。源太は自分の脇の座布團、紫縮緬の厚綿を投出して。

「二人だけよ。まゞ好いわ、眼張るにも及ぶめえ。お前もそれを敷いて暖まるがいゝ。今に何か出來る筈だ」

「いや難有いな、此奴ァ好い布團だ、火鉢も安くねえぜ。見廻はした處で座敷も悪くねえや」

のべつに賞め廻はす平六の正面に坐つて居る權藏が。

「其筈だ、苫の下と屋根の下と、疊の上と板の上とは、何處か違ふ處がなくッちやならねえ」

「それァ然うだけれど、初めて來た内にしちやァ、居心が好い。主人は何者だらうの」

「其處は未だ分らねえのだ。いづれ酒が始まつたら、留守番の奴等に酌を爲せながら聽くつもりだが。如何だ、この源太の見込は脱れッ子はあるめえ。酒があつて肴があつて、洋犬と主人とが居ねえ家へ飛込むなざァ、えらい者だらう。ちと恐入れい」

「本統だな、お前は陸でも稼げる人だから、これが海へ置けねえといふものだ」

「平の酒落は最う禁制だ、頼むから止して呉れ」

權藏が益々苦り切る處へ。

「へい、御あつらへ！」

女中を引立てゝ與八が來た。見れば能登製の黑塗の膳の上へ、御銚子に盃洗、但し女中の顔へるので大概水は零れて居た。

「酒は好さゝうだが、まづい面の女だな」

三平のひやかすのを、與八は遮つて。

「うな、そんな事を言かさずと、手傳ひに來いよ。老爺の汚な細工じや間に合はねえ」

「我の板前も怪しいが、どれ、行かうか」

與八に從うて三平は立つて行く。女中も亦立ちかけるのを、引留めた源太。

「お前でもまァ好いわ、さァ酌をしろ。えい、熱ッ、注ぐのなら盃の中へ頼むぜ。泥棒は泥棒でも可恐のではない、酒さへ呑めばそれで好いのだ。決して顔へるには及ばねえ事だ」

「は、はアい……」

「それで者は何があると言つたな」

「此、此所いらは、海邊で、は御座、います、が、この不漁で、な、なにも、御座いません、けど、小鯛の酢に漬けたのに……他には、鑵詰物か福神漬か。御海苔……唯今老爺が、海老煎餅で、御吸物を……」

「それだけ有れば澤山だ。さア其手間の掛らねえものを、此所へ運ぶがいゝ」

「は、はアい……」

まご〳〵しながら女中は立働く。間もなく吸物も出來る。老爺には更に米飯を爨くべく命じて置いて、見張りの三平與八は向ふで始める。此方では女中の酌で、三人が呑み始める。平六と源太とは饒舌りながら、權藏は獨無言りで遣つて居た。

「時に女中、此所の家は誰の別莊だ。主人は何者だい」

と問出したのは、盃を離した口で權藏が言つたのだ。兢々として居る女中は切々の言葉で答へやうとする時、平六は少々醉の回つた舌もつれで。

「そんな事は如何でも好いやな。さア我が獻さう、飲みねえな」

「えい、待て、如何でも好くは無えのだ。おい、女中、あの壁に掛けてある額の寫眞は、彼は誰のだ」

未だ戰慄の止まらぬ此家の女中は、殊に權藏を可恐がりながら。

「へえ、こ、れ、は、この、別莊の、持主で居らッしやる、御方で……」

權藏は頷いて。

「ぢやァ當家の主人か」

「いえ、當家の御主人は別で御座います」

「去て見ると此寫眞の人の家を、別に借りて居る人があるのだな」

「借りてといふ譯でも御座いませんが、矢張、借りて居らッしやるので……」

「何んだか、ちッとも分らねえ。それで當時の主人は何者だ」

「へえ、御主人は海軍の御方で……」

「士官か」

「はい、大尉で居らッしやいます」

「何んといふのだ」

「森戸繁とおッしやいます」

平六が一寸横から。

「其方い名は何んと申す」

女中は眞面目で。

「おたると申します」

權藏は平六を叱して。

「又口を出す、引込んで居ろい……それから其森戸大尉とやらは、今日は居ねえのか」

「はい、毎日滝車で、横須賀へ御通で御座いますが……今夜は御當直で……それで、御留守……」

「それは分つた、それでお前と老爺と二人で留守番をして居たのだな」

「左樣で御座いますよ」

源太は盃を下に置きながら。

「大層委しく調べるじやアねえか、何か思當つた事でもあるのかい」

「まア待つて呉んな、ちとおもわくが無いでもない。扨て女中、今夜歸つて來ねえと分つて居る旦那の、寢床が次の間に敷いてあるのは、あれは如何したものだ」

「そ、そ、それは、其、實は、今夜、御歸りかと存じまして、御寢床をのべて置きましたが、終列車が着きましても御歸りが御座いませんか

ら、それで、あ、今夜は御當直だと、初めて考へ着きましたので……」

「然うか、好し、それとして置いて、大層彼の布團の中がふくれて居るな。如何したのだ」

「あ、あれは、サラ綿が澤山に入つて出來て居ますので……」

「えい、布團のふくれて居る他に、持上つて居るのを訊ねるのだ」

「へい、あれは、その、あれは、御歸りかと存じまして、行火が入れて御座います」

權藏茲に至つて、、、すッくと立上り。

「然うか、彼の布團で行火まで入てあッちやア、暖くッて寢心が好いだらう。どれ、我は次の間へ引下つて、一寢入りやらかすから、他に御馳走が出來たら、起して吳れ」

言ひながら隔の唐紙へ手を掛て、がらりと開いた。女中はやうやく血の氣が回つて來かゝつた顏の色を、再び蒼白に變じながら、これも急いで

立上らうとするのを、源太が、どッこいと引留めて。

「彼方は構はず、こりや、お前の役は酌をするのだ」

《三》紅一點

籠洋燈の心を消かゝるまでに細くしてあるので、光は吉野紙をすら徹し得ず。薄暗い六疊の一間も、今權藏が隔ての唐紙を開いたので、明かに見える室の半部。違棚の上には金緣の寫眞帖やら、石膏細工の軍神の像やら、黑人が楯を持つて居る形の目覺シ時計も載せてあつて、地袋戸を芭蕉布で張つたのに、經師屋の遣り過ぎか、主人の好みか、金箔を散らしたのが燦めいて見えれど、床柱一本を隔て床の間の方は、半分開いた唐紙の陰と爲つて、押板の上に飾つてある彈丸の、日淸役の紀念らしいのが、辛うじて見える位。掛軸の書は何の筆か更に分らぬ。郡內織の三布蒲團に、白小倉のシーツ。八丈の大搔卷に、紫縮緬の肩當

此上に少しくめくれながら同じ八丈の夜具を打掛けた寢床は、明暗の半に敷いてあつて、成程裾の方が異樣に高く膨んで居る。

權藏は此所へ踏込んで、やをら搔卷をめくらうとして、振向きながら。

「これァ不思議だ、枕が船底の黑塗だ。主人は女ぢやァあるめえに」

斯く言つて、更に足の先きから藻潛り込まうとして、又。

「いやに香水臭いぞ」

思切つて寢床に入らうとする時、源太の手を振りもぎつて飛んで來た女中のおたる。血相變へて權藏に縋りながら。

「此所は、此所は、いけません!!! 御、御寢みなさるのならば、別に……」

「えい、何を言かすぞ。知らぬと思ふか。何も彼も我は見て取つたのだ。今更どたばた騒ぐない。面倒な、やい、平六、此女を柱へでもふん縛つておきねえ」

「如何した〳〵。其奴を縛ッちやァ酌の仕手がなくなるぜ」

「お代りには我が一人見着け出した。さァ源太、此蒲團をめくッて見ねえ」

「べらぼう。磯で岩をめくッて見ると、鮑やとこぶしが取れるものだが、蒲團をめくッて見て、何が居るものか」

「居るから不思議だ。それ見ろい」

と言ひ樣、力に委せて蒲團を引剝ぐと同時に、切放したやうな一叫は女の悲鳴、耳を貫く、これや疾き彼や遲き、おたるは狂亂の如く權藏を突退けて、身を持つて覆ふ其物は、權藏が見徹しに違はぬ若き婦人の、寢間衣姿のしどけなさを、繕ひかねて戰慄て居る。是や勢子に狩られた草間の雉子、彼の一聲は此婦人であつたのだ。

邪魔する女を源太が取押へて、帶を解てぐる〳〵卷に縛つて、頭から蒲團を冠せて突轉ばす內に、權藏は見出した婦人を、唯一抱へに持上げて。

「此處は暗いわ、明るい處で顏を見やうよ」

と長火鉢の傍へ連れて行つて、自分の膝の上に載せた儘、どッかとばかり座布團の上にくつろげば、平六が洋燈を突付けながら。

「好い女だ、滅法美しい。此奴は掘出し物だぜ」

と目尻を下げた。

「我には後向きだから、未だ見えねえが、可愛さうに、攫んだ目白の雛が掌の中で顫えて居るやうに、ぶる〳〵ときつい恐れ樣だ。最う藻掻いても駄目だから、ぢッとして往生して居るが好い」

權藏は斯く言ひさして、頻りに此手を離れんとするのを抱きすくめて居る處へ、三平と與八が遣て來て。

「どれ、見せねえ、美しい女を掘出したのだッて」

「見せねえ〳〵、女中の赤ら顏とは違ふだらうの」

次の間から源太も來て。

「こう、我は女中の畜生を、蒲團蒸しに仕て來たから大丈夫だが、三平

に與八は、老爺の方を逃しは仕ねえか」

「なにさ、案じなさんな。此方で女の泣聲が仕出すと、老爺奴、吃驚仕やァがッて、切掛けて居た漬物の庖刀でもつて、我等に刄向やァがッて、奥樣に狼藉はさせねえと言かしたから」

「殺すのも餘計な手數と、今二人で手足を縛つて押入の中へ突込んで來たのだ」

「それなら好いや、さァ五人車座で呑直さうぜ、これ、權や、お前ばかり抱切りは好くねえ、其處へ下して酌人にしろえい」

「言はなくッても下すのだ、輕いやうでも女一人、おびれが少々切れかかッた」

源太と權藏との間へ引据えられた婦人は、面を伏せて泣頽れて仕まつた。

目覺シ時計の黑人は常に枕下へ立つて居ても、唯眠り足らぬ耳に喧しい

のみだが、これは其黑人の顏よりも一層獰惡なのが五人揃つて、加之白刄の疊の上に植ゑられて、座敷の中の氷柱恐ろしく、それが螺線の過ぎた鳴鐘にも劣らず、姦しく饒舌り散らすに、若き婦人の素より生きた心持がない。頼みに思ふ女中も老爺も、既に繫られて聲も立てぬ折柄、今更呼んでも叫んでも、誰か救ひに來て呉れやうと、悲しさの極――涙も留らぬ、顏ふのも止まぬ。顏を伏せながらやうやくにして、解け掛つた扱帶を締め直し、亂れた寢間衣の襟を合せるだけのたしなみは仕ても、其他は殆ど魂があらぬ。

其つゝ伏したのを上から見下すに、永く蒲團の中に隱れて居たので、丸髷の形は頽れ、上氣して耳朶の薄紅に、襟筋の飽くまで白いなど、其顏を能く見ぬ權藏にも、世の常ならぬ美しさが悟られて、雨に倒れた菊の花、是非起してながめて見たい。

「如何だ、我の眼の着け方は違つたものだらう。我が掘出したのだから、先づ誰よりも先へ酌をして貰はうぜ」

むづと左の手を彼の人の左の肩から指し入れて、引起して無理に顏を向けさせやうとする、これを眼映し氣に避けやうとする。向かずんば向かして見せやうと、左の頰へ手を當て、力に委せて引向けた時。

「よ、よッ」

驚きながら壁の額の寫眞を見て、又更に婦人の顏を見かへして。

「平六、最一度洋燈で能く見せろ。これァ不思議な事があるぜ」

「そら面火だ。穴の明く程見るがい〳〵」

平六が再び置洋燈を取上げて、火屋の破れるまでに心を出して、婦人の顏を照らすので、つく〳〵見入りたる權藏は、思はず知らず頰に當て居た掌を緩めて。

「違ひねえ、これだ。全く不思議だ、奇體な事もあればあるものだ。おい、皆、聽いて呉れ、此女だぜ」

「何が此女だ」

源太に三平、與八までが同じ時に同じ問ひを放つた。

「最う洋燈は下へ置いても好いか」

と平六も同じ時に言つた。

「彼の時は束髪、今ぢやア丸髷、三年立つたのでいくらか樣子が違ふけれど、彼の寫眞の親爺の面といひ……處も逗子だ、此女だ。平六、船で話したのはこの女だぜ」

「助けたといふ娘か。貴族院議員の飯島とか言ッたッけな」

「然うよ。おい、御女中、お忘れかい。この男の面やッ面を」

けれども見る處ではない、少しく權藏の手の緩んだので、いつの間にやら下を向ひて居るので――此時は、最早や涙も留つて、顏えも仕ず、上氣た耳朶の薄紅も消えて、飽くまで白い顏の色が、飽くまで蒼褪めて、唇を嚙締めて、何處やらに凛と張の生じて、一つの覺悟が出來たらしい樣子。

「これ、御女中、忘れちやァちと濟むめえぜ。お前の喉元を通つた鹹い水の味を、まさかに過ぎた昔だと、忘れ切るのは非道からうぜ」

けれども答へる處ではない、身動きも仕ずにちやんと手を膝の上に重ねて置いて居る。釣上げられた時に跳ね散らす鯉魚も俎の上に乘つてからは、尾鰭一箇震はせぬやうに、見出された時の恐れおのゝきも、此場に爲つては別人かと思はれる程の落着き樣。流石の權藏もちと薄氣味が悪くなつて來て、肩から掛けて居た手を全く引去つて、直ぐと其手に盃を取上げた。

「さァ權藏。お前から注いで貰ふのぢやァねえか、何をぐずぐして居るのだ、御跡がつかへて居るぢやねえか」

源太が一本極めながら、銚子を鐵瓶から取出して、熱いので口の先をつまみ、これを婦人に持たせやうとして。

「さァ御酌を頼むぜ。お前さんの御手からだと、又格別だ」

けれどもそれを持つ處ではない。膝の上に重ねた手は指一つ動かさず、指環のトッパスが、きら〳〵と燦めくばかりで、こは抑も、石像と化したのではあるまいか。

右からは權藏が盃を差出し、左からは源太が銚子を突付け。いざ、注げ。いざ、飲まうと、詰めかけて居る、向ふには、三平與八平六の三人、面を揃へて、此女が如何しやァがるかと、眼を据ゑて見て居る。萬綠の叢が、ぐるり、取圍んだ中で、紅一點——唇を初めて開いて。

「妾は海軍大尉森戸の妻澄子……夜盜の酌が如何して出來よう!!!」

「何んでえ、何んでえ、何んでえ、何んで酌が出來ねえのだ」

「何んだ、何んだ、何んだ、何んで酌が出來ねえのだ」

「何んで酌が出來ねえのか、これが本統に癪に觸るのだ」

向側の三人が承知仕ない。今にも立上りさうなのを、源太がまづ〳〵と

制して置いて、扨て居直つて婦人に向ひ。

「こりや面白い、若い奥さん、いやさ、海軍大尉森戸の妻の澄子さん。何んですと。夜盜の酌が出來ませんえ。此奴ァえれい御見識だ。實に如何も見上げたものだ。斯うなくッちやならねえ事だ、が、扨て、然うお言ひ出しなすッたからには、疊に突刺して居る五本の抜刀を、秋刀魚か太刀魚同樣に、安く御踏倒しなすッたのだね。その覺悟でなくッちや言へねえ事だ。面白い、酒ばかりの盜人も、變つた料理が出來るといふものだ。言出したからには彼に對しても引込まれねえ。是非海軍大尉の奥さんに、御酌が仕て貰ひたくなる奴で……」

言ひながら、銚子の口の先を持つて、ぶらりと下げて居るのも押がきかぬと、再び鐵瓶の中へ漬けて置いて。

「とまァ言出すと角が立つから、そんな事を言はねえで、ねえ、機嫌好く一杯づゝ、注いで遣つて被下い。然うすれば皆喜びやす。なに貴女、

陸を稼ぐ泥棒ではなし、海賊――へえ、私等は皆海賊です。それが仕様事無しに今夜ばかり、酒ばかりの盗棒といふ、餘程風の變つた行き方。決して此他には手は出しませんわ。殊に御婦人方へ對して悪い不禮は致しませんわ。ねえ、唯々其御手で酌さへして被下れば、皆喜んで引取りやす。此處でさァ御話は。貴女の方から、夜盗なんぞの酌は仕ねえと、眞四角に切出しておいでなされば、此方も實は丸くねえ性根の男達。つひ荒療治を仕出來されねえとも、ま、限らねえので。然うした時にはお前さんも、見た處が十八九、嫁に來なすッてからまだ多分の月日も立つては居ますめえ。嬉しい盛りの大事な處で、飛んだ無常を見ねえぢやァならねえ。如何です、奥さん、一番碎けて被下いまし な」

源太が斯う言つて、輕く婦人の肩をたゝいて、はゝゝと高笑ひして、又取出す鐵瓶の中の銚子。

「あつッつッ、大熱の上燗だ」

袴を着せて、又突付けた。言葉は道理じみても、事實が侮辱であるからは、如何で應ずべきと、一筋に若き婦人の考へつめては、讓合ふなどの變通は未だ取れず。いづれは殺されるものと覺悟を極めた後の事とて、此位では中々動かされぬ。

「妾は如何しても酌は仕ません!!!」

「へえ、如何しても、へえ、如何して酌は仕ません?」

そろ〳〵源太の眼は窪んだ中で光り出した。

「出來なけれァ無理に爲せるばかりだ」

銚子を强て持たせやうとする。拒んで、拂ふ。又持たせやう、とする。持たじとする。拍子に、ばッたり、袴から滿らして、熱燗鉛を鎔かしたやうな酒は、澄子の膝の上にこぼれて、飛沫は源太の臑を濡らした。

「大あつい!!!」

すばかりに爲つて、留つて、手もて鬢のほつれを搔上げながら。

「最うそれよりか、妾を殺して……」

「殺すとも。うぬ、撲り殺すのだ」

と三平が再び手を振上げた時に。

「待てッ」

一聲高く源太が言つた。

「待つて如何する」

三平が問ふた。

「酌が厭なら他の事を爲せる……」

「他の事とは……」

「分つて居らァな。あッはッはッはッ」

揉出したやうに源太が笑出した時に、平六が横手を打つて。

「實はそれを待つて居たのだ」

妻たる者が給使をしたと聞えては名譽は如何しやする、面目無さは何んと仕まする。それよりは繁が妻は、盜賊の無禮を防ぐために、身を殺したとあらうには、良人の顏も汚れぬのみか、父上も母上も、どの樣に御賞めなされやう。それよ其事と決心した澄子。

「最う何んとあつても、誰のでありませうとも、妾は決して酌は仕ません」

權藏が未だ何んとも言はぬ內、言合せたやうに立上つた三平に與八。

「何んだ、いよ〳〵以て酌を仕ねえと。馬鹿に仕て居やァがる。貴族の娘だらうが、軍人の嗅だらうが何でい」

「何んだ、鼻にかけやァがッて、海賊樣の酌を仕やァがらねえとは、强情な女だ」

火鉢を兩方から廻つて、澄子の後へ突立つて、二箇三箇背を撲つた。あまり强く撲つたので、前へ倒れかゝつた澄子、火鉢の烈火に前髮を焦が

「至極結構だ、頗る妙だ」

此決議の聲を聽くと忽ち、押入の中の老爺が、どたばたする。蒲團の下の女中が呻き出す。打遣つておいた釜の蓋が持上つて、米飯の焦げはじめたのも同時である。

それにも構はず、手取り、足取り、次の間へ澄子を引立てやうとした、此時。

「まァ待てッ!!!」

一聲高く——彼の源太が曩きに三平を叱したよりも一層高い聲で、權藏が呼はつた。

「吃驚したわ、權藏、何が待てだ」

と源太が言へば、跡の三人も口を揃へて。

「何んでお前は留めるのだ」

權藏は落着きはらつて。

「何んで留めるもねえものだ。お前達は此婦人を如何しやうとするのか。それから先づ聽かして貰はう」

「如何するもねえものだ、分り切つて居るぢやァねえか」

と源太から先きに立つて、早や腰を立てるを、權藏何處までも尻を据ゑて。

「分り切つて居る事を、年甲斐もねえ、お前から先棒に爲つておッぱじめるとは、いや、はや、呆れて物が言へねえ。三平や與八は年若だ、平六は例の甘鹽だ。そんな無叛を持上げねえとも限らねえが、お前は何んだ、仲間の内での一番年長。我が言出しても留めるのが當前だ」

「だがの、權藏、……まさか見のがしても置かれねえや」

「それぢやァ酒ばかりの泥棒と、約束したのを無にするのか」

「ちよッ、そ、そういふ譯ぢやァねえけれど、あんまり强情な此女だ。我達の酌も爲ぬわ、恩人だといふお前の酌までも仕ねえと言かす。あ

んまり癪に觸るから、たゝき殺してと思つたところを、命だけは助けてやッて、此方の勝手に仕やうといふのだ。何んの不思議があるものか。お前もそんな堅い事を言ふものぢやァねえやな」

「馬鹿ッ馬鹿ッ、向ふが強く出て酌を仕ねえから腹が立つと言つた處で、本統に腹を立てる日になると、誰よりも先づ我が、一番に怒らなけれァならねえのだ」

「それは然うだ」

「ところが我は腹は立てぬ」

「如何して」

「立腹どころか、我は實に恐入つたのだ。うむ、此婦人に感服したのだ」

「それァ又如何して」

「考へて見るがいゝ、我達のおどかしにも恐れず、海軍士官の奥さんが、良人の留守に海賊に這入られて、それで酒の相手をしたとあつて

は、名譽に關するといふので何處までも強く出て、殺される覺悟で斷わり通した、此處を買つて遣らねえぢやァ、骨のある人間の價値が下るといふものだ。年齢は若いが、實にえらいと思ふ。我は先きから感心して居たのだ。女でも此位の覺悟が無くッちやァ困る。人間には何處かピンと彈く處がなくッちやァ不可とは、平常我が口癖に言つて居る處だが、其ピンと來る一癖の婦人を、無理無體に力づくで押伏せるのは、ちと非道からうと我は思ふのだ」

「海賊だもの、非道い事もするのさ。お前のやうに言つては何も出來ねえ」

「いや、出來なかァない。仕て好い場合と、仕て悪い人間とがある。此場合では止せといふのだ、此婦人には手を出すなといふのだ。如何だ分つたか、一度助けた此人を、最一度我に救はせねえか」

不承無性に源太から先づ手を放して。

「お前が見付出した代物だから、止せと言やァ止さねえでもねえが。まァ見るがいゝ、此美しさ加減を……滅多に傍へは寄られねえぜ、二度と再び……」

平六はぶる〳〵武者振ひをしながら。

「寶の山へ入りながらだ。生れてから今日まで、此程美しいのも見なければ、又此位殘り惜しいと思ふ事も、先づ無いのだ」

三平に與八も舌打をしながら。

「そんな事を言はねえで、おい、權や、まァ好いてことに仕やうぢやァねえか」

權藏は頑として應じない。彼の海に溺れかけたのを、泳着いて抱いた時の如く、殘る三人の手を拂つて、此方の手に、澄子を奪つて抱いた、最う其時の眼の光と顔の色とが、何處までも言出したからには我説を押通すいつもの景色を現はして居るので、無理に手を出して又取戻さうとは、

誰一人爲る事ではない。

澄子は豫め考へた。酌を拒む時は必らず彼等が怒つて、此身を殺さうとするであらうと。然るに思ひも寄らぬ、酒の相手をするよりも、幾層上の大恥辱を與へられやうとしたので以て、其口惜しさ其腹立しさ其又悲しさは、一通りでなかつた處へ、嬉しくも權藏の留めて呉れたので、彼の海に溺れて死にかけたのを助けられた、其時の嬉しさよりも、尚幾百倍の嬉しさを以て權藏に身を寄せた。此時、次の間の目覺シ時計は、黒人の腕を擧げると同時に、絶間なく鳴鐘の響き出した。

海賊は皆驚かぬはなかつた。

「何時だらう」

誰もが問ふた。

「彼は五時に掛けておいたのです」

と澄子は勢を得て答へた。

「五時……これァぐず〳〵しては居られぬわい。それ、源太、最う引上げやうぢやァねえか」

「うむ、仕方がねえ、如何しても仕方がなかつたのだ。いめえましい」

「せめてもの事だ、自棄酒でも引掛けてから行かう」

「折角此所まで漕付けて、御止めに仕た腹癒に、鱈腹喰つて行きてえが、刺身か何かねえだらうか」

「そんな物は有は仕ねえ。臺所で米飯が焦げて居るばかりだ。ちよッ我も胸が焦げるわいやい」

「仕方がねえ、御緣の無えのだ。罐詰の口は開けながら、肝腎の御馳走を食ひそこなつたのも、全く權藏、手前の御影だぞ」

「それで權藏、一人で好い兒になりやァがる。尙つまらねえのは此方等だ」

「おい、若い奥さん、此男がお前さんの難儀を救つたと思つては、ちと

譯が違ひますぜ。私等が勘忍して上げたのだから、其つもりでおいでなせえまし」

「やい、そんな事はまァ如何でもいゝ。さァ〳〵五時だ五時だ。風もすつかり落ちたやうだ、さァ行かう、さァ早く行かねえか」

權藏は連りに急立てた。

急き立てる權藏の前には、四人の荒男がぶつ〳〵不平面を並べて、引上の身支度を仕て居る。急き立てる權藏の後には、身を縮めて居る澄子。

權藏が前を促して、更に後をいたはるべく振向いた時に、口では言はれぬ此場の禮を、澄子は手を合せて意で示した。これは恐れおのゝいた時の顏でもなく、怒りいきどほつた時の面でもない。嬉しさ喜ばしさの眞底からの笑顏であつたのだ。これを見たのは實に權藏一人で、澄子が眞の美しさは、正に二人の權藏が、刹那の間に認めたのである。

澄子が合せた手は、權藏の背の陰である。權藏は前に對しては何氣なき

面を示して、後に向つては急劇に右の手を突と廻はして、澄子が雪の如き手の先を、力の限り握締めた。

驚いて澄子は手を引かうとした。引かせじと又強く握つたので、指一本取留めた。又それを引去つた時に、これや偶然!!! 取るともなく取られるともなく、寶石嵌めたる金の指環の、權藏が手に消えもせず解けもせず永久に殘つた。

これを取つた權藏は、如何なる情が生じたらうか。これを取られた澄子は又如何なる感が起つたらうか。

恐らくは未だ何といふ一箇の結生を認めぬ内に、曩には急き立てた四人の仲間から、今度は促されて權藏は去らねばならぬやうに爲つた。つひに五人悉く引上げた。

外にはあれ程の風全く落ちて、家の内も亦靜まり返つた。此時、勝手の方の柱時計は正に四時を報じた。螺線を違へた自鳴鐘は、鷄の空音の手

柄に同じだ。

澄子は少時は茫然として唯立つて居たが、次第に魂が我に復るにつれて、野分の跡の却つて恐ろしく、氣の張が取れてからは、座敷の狼籍を見るにつけて、猶恐ろしさが百倍で。

「老爺や……たるや……」

と呼び廻はつて、蒲團の下に葬られ押入の中に封じられた、二人の影を見出すに苦しんだ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

紅を解かした樣な空の色。紫を流した樣な潮の色。其紅の中にも墨より黑き一團、これや雲。其紫の中にも、雪より白き一塊、これや涙。黑雲の分裂れて落つ、と見えるのは、濱鳥の飛ぶので、白涙の寸斷けて立つ、と見えるのは、海鷗の散るので、それとこれと入亂れて鳴立つる間

に、日は漸く海の底から天上に昇らうとはする。此時既に相摸灘へと漕出でゝ居る船一艘。乗組は五人。

張るに網無し、垂るゝに糸有らず。何の漁か、これや、白浪の、魚なら ぬ魚を待つ汐に、眼を配る魚見櫓。此所に突立ちたるは權藏である。

眼界四方何十里。東には安房の洲の崎。北へ廻はつて三浦の半島。兩の角の見越しは房の富山、西へ取つては、大山よ、富士よ、箱根よ。南へ伊豆の連山。飛んで東寄は烟吐く大島山。

鯨の背の汐を吐くは見れど、海豚の鰭の浪を切るは見れど、海龜の甲の上に渦を卷くを見れど、鮫の鼻面に泡を吹くは見れど、これらしき船一艘も見當らぬに、權藏は落膽の聲に力なく。

「陸と違つて海の仕事は、日のある内だが。これだけ見廻はしても見付出さねえとは、昨日の暴浪が餘程響いたと見える。えい、相摸の海は脈が無え、思切つて歸らねえか」

《五》灘上

脇櫓一挺、艫櫓一挺、魚見櫓の權藏の言葉を、帆櫂に倚つて居た源太が聽咎めて。

「珍らしい事もあるものだ。いつもなら、今日の樣に脱れやうとも、景氣好く漕廻はつて、沖は殊更、入江の隅まで探し歩いて、よく〳〵不漁と見込んでも、お前一人が强情張つて、甘い仕事のあるまでは、夜に爲つても遣る氣で居て、次第に由つては北海道まで漕付けて、密獵船でもおびやかさうといふ、龍卷の權藏とも言はれる者が、未だ朝ッばら早々から、弱い音を吹いて見切を着けて、引歸さうとは如何した事か。そんな事を言はねえで、今に扳荷を積んだ帆前船でも通るだらうから、其奴を待合せて見やうぢやァねえか」

權藏、かぶりを振つて。

「お前達は今日の沖合で、甘い仕事が出來ると思つて居るのか。男は見切が肝腎だ、我ァ駄目だと極めを附けたのだ」

「それァ權藏、ちと早過ぎるぜ。それ、やッと日の出たばかりぢやァねえか」

「日の出たばかりに相違ないが、見渡す海は三十六里。相摸灘に白帆一箇見えぬのは、餘程悪い日和だから、御幣を擔いで今日は止さうよ。それともたッてお前達が、仕事を爲ると言ひなさるなら、我ァ一人で歸るばかりだ」

「一人で歸るッて、此沖合。船が二箇に割られやァ仕まいし。そんな事が出來るものか」

「出來なくッてよ。歸らうと思やァ、板子一枚有れば澤山だ」

「三崎までは漕がれやうとも、房州までは歸られまい」

「如何しやうと其先きは勝手だ」

「と言つて、お前を一人海へ飛込ませて、三崎まで泳がせられた義理ぢやァねえから、そんな事を言はねえで、少しは突合つて呉れるがいゝやな」

「厭だから我ァ歸るよ。如何しても歸ると極めたのだ」

「あんまり理窟が分らねえ。お前が昨夜我を説破した人とは思はれねえ。丸で別人のやうだ」

「むら〳〵とすれば、我は理窟なんざ分らなくなる。何んでもいゝから我ァ歸るのだ」

「あんまり、それにしても、理窟が分らなさすぎるぢやねえか」

「我ァ理窟は分らねえのだ」

「それァ我儘といふものだよ」

「實に我は其通りだ」

「お前の我儘も落着いて來れば、理窟の分らねえ男でもねえのだが、如

何したものか、今朝は又、一層はげしい。こう、權藏、今までは皆、お前の言分を通したぜ。酒だけの泥棒にしろといふから、酒だけにした。女を苛めるのは止せと言つたから、それも止した。扨て肝腎の海賊家業、朝の内一艘も船を見ぬからッて、止して歸るとはあんまり分らねえ。おい、權藏、お前氣でも違やァ仕ねえのか」

魚見櫓から降りて來て、權藏は源太の前にどッかと坐しながら。

「いや氣は違はぬ、たしかな權藏だ。分らぬなりにも理窟は分つて居るのだが、何んだか急に今日は厭に爲つたから、止すといふのだ。お前達にも止しねえと勸めるのぢやァねえ、我ばかり止して、泳いで、それで歸るといふのに不思議はあるまい」

源太は帆櫂を脇へ遣つて膝を進めながら。

「なる程お前の氣性では、時々不意と厭に爲つて、物事を止さうと言出す事が無いでも無い。これまで度々あつた。けれども、亦例の我儘が

始まつたのだと思つて、我を先きに誰でもが、取合はずに打遣つてはおいたが、今日のやうに又強く出るのは珍らしい。あんまり我儘の火の手が強過ぎるから、それで我が斯うも言ふのだ」

「最う源太、何も言つて呉んねえ方が好い。何んとなだめても駄目なのだから　留められゝば留められるだけ、行きたくなるのだ、歸りたくなるのだ」

「ちよッ沒理漢!!! 勝手に仕やァがれ」

いよ〳〵源太は腹を立てた。

「海賊の五人の仲間、頭領無しの我勝に、天狗揃ひの我儘同士。中々丸くおさまらねえ奴も、今日が日まで睦まじく仕て來たといふのは、お互ひに生死を誓つて、義を結んだ兄弟分。どんな事が有つても一身同躰、遣る處まで遣付けやうと、豫て契約が出來て居るので、ま、大概の事は通して居たのだが、あんまり身勝手ばッかり言出されて見ると、

此方等も亦並の腹の者ぢやァなし、勃然と癪に觸つて來るのだ。さァ如何ともおのれ勝手にしろ、途中で鮫に食はれやうと、凍へて其儘溺れやうと、此方の知つた事ぢやァねえ。さァ勝手に飛込め、板子を持つて行けァがれ」

「行かなくツて如何するものか。我儘々々とお前達から言はれるまでもねえ、この我儘が枉げられいで、海賊にまで爲つた權藏だ。勝手にさろなら勝手に爲るのだ、どれ、飛込まうか」

と立上つて、眞裸に爲る處を、平六が押留めて。

「これさ如何したものだ。あんまり短氣といふものだ。と、まァ我が留めた處で留るお前でもなからうが、先きへ歸る爲めに船から飛出すも好いとして、それ切り仲間を脱れるなざァ、好くねえぜ。何事も小感情で喧嘩の仕ッ子は無しといふ約束を、忘れちやァ權藏いけねえぜ」

「好いよ、蒼蠅!!! それ、邪魔だい」

「いよ〳〵飛込むのか、裸躰で行ッちやァ陸へ着いてから困るだらう」

「馬鹿奴、其處は海賊の難有さだ」

板子を抱いて飛込んで、涙のまに〳〵行方知れず。流石の源太以下命不知の奴輩も、これには舌を卷いて、其無法を驚くばかり。

(十八) 指環

うたかたの安房の國、泡の一箇の浮島を入る日の前に見て、北横に傾城島、南横に虹ケ島、加知山と岩井袋との間、此所に突出したるは鬼ケ鼻だ。

鬼も住みかねる荒磯に、誰が建てたる小家ぞ。岩と岩との間に挾込まれて、涙に淚はれる事を避け。松と松との間に割入つて、風に倒される事を脱れては居る。柱かと見れば、座敷の中に松があり。壁かと思へば、部屋の内に岩がある。されば、軒の上に鶴の戯れ、椽の下に龜の遊ぶ、

それ程にはあらねども、荒鷲の飛來つて、屋上に翼をやすめ、海蛇の浮上つて、家下に口を開くは、敢えて珍らしい事ではない。

冬の期に有りとも思へぬ、うら〳〵と暖かであつた日の、何事もなく海の向ふに入らむとする時、今迄海龜の甲を干す如くに寢て居たる一人の男は、此小家の椽側に起上つて、風も無し、浪も無し、夢の如く優しき海面を見遣つた。

男とは誰——權藏である。

見遣つた海面の眼を此方に戻して、おのが左の掌を屹度見詰めた。其手の内には、夫婦涙の毛彫のしてあるトッパスの箝めてある可愛らしい金の指環!!!

權藏は其指環を右の手に取つて、そして左の紅さし指に箝めやうとはしたが、如何しても小くて通らぬ。其節くれ高き松の根を見たやうな權藏の指には、たとへば浮島の洞門を漁船が潜らうとするやうなもので、迚

も無効だ。

それを無理にも指へ通さう、是非一度は通して見やう、と爲るので、これが他の物であつたなら、疾くに指環は裂けたであらう。けれども、これは金屬であるので、權藏は手を痛めた上、涙の模樣を紅に染めて仕まつて、皮を剝き、肉を露はし、血は寶石の光を汚した。

斯くても、一心を此所に凝固めて、白魚の脫れた網の目から、蝮蛇も追ふて出でんと急る如く、執念くも、指を通さうとする。それで益〻皮は剝け、血は流れ、肉と骨とを削去るにあらずんば、止むまじふぞ見られた。

流るゝ血に滑なるを幸ひ、濘らし〳〵、指に箝めやうとは仕ても、如何しても未だ通らぬ。

斯くても流るゝ血を啜り〳〵して、飽くまで箝めやうと急る内に、權藏の唇から頰へ掛けては、鷄を食ひし僧の如く、紫血を以て染められた。

如何してもこれは箝められぬか、彼の人の指環は如何しても我には箝められぬか、と權藏腹の中に悲しみ口惜しみ、せめてもと、次ぎの小指にこれを當て見た。

嗚呼、けれども其小指にすら適はぬ。貴女の指は細きが上に雪の如く、海賊の指は太きが上に岩のやうであるので、彼は形よりも尙細くなるとも、此は形の太さは何處までも縮まらぬのだ。

魂負けして、又元の如く椽側に倒れた。けれども指環は大事に握つて、血に染まつたのを口で嘗めて、其汚れを消して居たが、後には情の一時に激し來つたか、寶石への接吻と爲つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

夢現ならぬ夢現から覺めて、睡眠ならぬ睡眠から權藏が再び起上つた時には、海天倶に既に暗くして、星と漁火との區別定めがたし。星の滅するのは雲の過ぎるのか、火の消えるのは浪の激するのか。扨ては風の出

でたるよ。

消えて痕無き相摸の山々が、權藏の眼には忽然として見えて來る、其山の向ふには彼の人の未だ居ると思へばこそだ。

見えて來るのは山ばかりでは無い、逗子の景色、別莊の有樣、其所に寢間衣姿の一人の令孃——如何しても人の妻とは思はれぬ、其美しき人は、二度までも災難を救はれたる嬉しさを謝する爲に、口には言へぬ心の內を、手を合せて表はした、其時の手の、其時の指の、其時の指環、それは此所にある指環、嗚呼指環に氣が着くと同時に、今までの彼の人の姿は、逃げるやうに消えて仕まつて、そして相摸の遠山も見えぬ。海面には星か、あらずか、不知火か。

權藏斯くの如き空想と現影との消去せるや忽ち、急いでそれを追はうとする、捕へやうとする、けれども遠く二十里の西の方、海を隔て、山を越して、三浦の彼方の逗子の入江、嗚呼如何する事も出來ぬのである。

今まで此所に來て立つて居た、と見たは搔消されて、殘るは確かに彼の人の指環。これは消失せぬ、なつかしさに、又一箇の接吻。

せめてもとて、又指環を見詰めて居れば、不圖誰やらが問ふやうに思はれる。それは誰の指環か。これは海軍大尉森戸繁の妻、澄子のだ。彼は森戸の妻ではあるまい、飯島貴族院議員の娘であらうと、又誰やらが言ふやうに思はれて、然うだ〳〵とこれに答へた。だが、彼が森戸といふ人の妻だと思ひかへすと、厭な厭な何んとも言へぬ心持に爲つて來て、又倒れたくなると同時に、彼が飯島といふ人の娘だと思ひ直すと、如何にも嬉しくて、何かの望みが有るやうに感じられて來る。又一層深く考へて見ると、其飯島といふ奴は、自分の敵であるかのやうに考へられて來て、それの娘かと思ふと、又厭な厭な何んとも言へぬ心持に爲つて來て、又々倒れたくなつて來る。おかし、手に指環を持つて居るので、それの力に引留められたかのやうに、危くも踏こたえて、眼は矢張それを

見詰めて居る。

見詰めて居る內には其指環、それにはどんな指が箝まつてたかと考え出す。其指から手、手から姿、後には又彼の人が傍へ來て居るやうに見えて來るので、なつかしさに、嬉しさに、物言ひかけやうとして、不圖心着けば、又消えて、又失せて、追ふ事も成らぬ、捕へる事も出來ぬ。嗚呼、手に殘るは又しても指環。

此指環が無かつたなら、斯うした事もあるまいに、一思ひの事、海の中へ投げて捨てやうかと權藏は考えた。

此指環に魔力でもあるやうに、これを取つてからといふものは、唯何となく、戀しくて、戀しくて、戀しなつかしい彼の人。嗚呼、彼の時は傍に居た。我は彼の人を前に抱いた。我は彼の人を後に覆ふた。けれども今は如何する事も出來ぬ。遠く隔たつて居る事二十何里、間には山もある、海もある、それのみならず、二人の間の隔たりは、彼は、軍人の妻、

貴族の娘、我は何者、海賊であるのだ。

捨てられぬ、滅多に捨てられぬ、此戀を捨てゝ仕まはねば、此指環は捨てられぬ。何故ならば、我は彼の人を此所に伴ふて來る事は出來ぬとも、我は此指環に接吻するのは自由だ。如何しやうとも我の勝手だ。大事な大事な此指環だ。

嗚呼、嗚呼、如何しても我は彼の人を、此小屋へ連れて來る事は出來ぬのかと、權藏は手を握締め眼を見張つて、そして海の向ふの方を睨んだ。けれども、星光、漁火、共に鈍くして、姿は見えぬ相摸の山々。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

其夜權藏は此樣な夢を見た。常に幻の如く眼前に現はれて傍を離れぬ澄子、それが夢ながら夢で無く、板子一枚に縋つて海を泳いで、そして鬼ケ鼻の住居を訪れに來た。やれ嬉しやと急いで抱上げた時には、三年の昔、彼の海水浴の時を見たやうに思はれた。權藏は嬉しさに何事をも忘

れて、大事に〳〵抱えて居た。すると澄子の躰が益々小く縮まり萎んで、後には指環程の形に爲つて仕まつた。それを手の平に載せて、そして接吻しやうとする——と血に染まつて居る夫婦涙の毛彫り。目が覺めて見ると、指環をしッかりと握り締めて居た。

又いつの間にやら夢に成る。そして前の續きを見るのだ。此時の澄子は指環の樣な小さなのではない。又前の海水浴の時の姿でもない。丸髷の少し亂れた、顏の色の上氣して居る、彼の蒲團の下に隱れて居た時の有樣で、權藏の前へうなだれて居る。如何して此所へ來たのか、と權藏が尋ねた。これに澄子は答へて、一度の助けられた大恩を忘れねば、それの禮を述べに遙々來たと言つた。おう、それで此所まで來て被下れたか、と思はず知らず手を延ばして、開いた指の間から、轉げ出した指環の音に目が覺めて、つひにそれからは、眠られず、夢も見ず。松の聲、涙の音、壞れて居る木枕を更に碎くかとばかり、それを今まで知ずには居た。

二度助けたのを徳として、禮に來る人、夢にもせよ恩を忘れずに居る人を――此方から二度助けたのを恩に着せて、無理に此所へ連れて來やうといふやうな、そんな我では決して無い、と斯く權藏は心の内に叫んだ。

人の妻だ、是非もない。親が氣に入らぬ、仕方がない。身分が違ふ、如何する事も出來ぬ。けれども我は海賊だ、おう、我は海賊ではないか。海賊が人の寶を奪ふのも、まかり間違えば命まで取るのも、それ、人の妻を盗んで來るのも、同じではないか。

海賊だ、からには構はぬ、彼の澄子を奪取つて來やうとも……それ程までには我は思切れぬ。

それに又仲間の者が、狼籍を仕やうとしたのを、我は立派な事を言つて留めた。留めておいて後へ廻はつて、一人で盗んで來て傍へ置く――酷い。仲間が承知せぬ。

承知せぬ仲間を片ッ端から撲き殺して、其上で添ふ……それ程までには我は思はぬ。

最う如何する事も出來ぬ。唯々此指環を大事に持つて居て、心の内で彼の人が此所に居るやうに思つて居れば、それなら我は差支が無いのだ。

それだ〳〵と權藏は覺悟を定めて、立上る其下から、最早や何やら物足りぬ心がむら〳〵と起つて、涙の音も聽えぬ、松の聲も聽えぬ。小夜千鳥鳴いて渡るは相撲へか。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

海賊であるからには、人の妻を奪取つて來やうとも構はぬといふ、それまでには思切れなんだのも。仲間の者を殺して仕まつて遠慮を無するといふ、それまでの勇氣が出なかつたのも。二日立ち、三日過ぎ、毎日毎夜、同じおもひに結ぼれて、戀に追詰められた權藏。最早や耐えられないやうに爲つて決心した。指環ばかりでは滿足出來ぬ、如何しても本物

を此所へ連れて來なければ承知が成らぬ。

源太、平六、三平、與八、永い間の友達であつた。けれども斯うなれば仕方がない。彼奴等が狼籍を仕掛けた時に、我が立派な口をきいて留めたばかりに、今更我が彼の人を連れて來て、此所で共に暮らすと有つては、迚も承知する事ではあるまい。我も亦、彼奴等が生きて居ては心持が悪くつて、樂しむ譯に行かぬ。

我儘と言つた、我の事を——其我儘を通す爲に、我は彼奴等を片ッ端から殺して仕まふのだ。

けれども、此我儘さへ通して仕まへば、これから後は最早や何事も意の如くならなくても、決して無理に通さうとは思はぬ。今度ばかりの我儘、一個に、一生の不如意を賭けたのだ。況してや、身分の相違、何んのその。人の妻であらうと、親が氣に入るまいと、斯うなれば構つて居られるものか。

さァ來い、斯うなれば、どんな事でも仕通すのだ。鬼ケ鼻の鬼の住む岩窟に、鶯を啼かして見せる。これからだ、扨てこれからだ。

これからだ、これからだ、と權藏は晝夜の差別無き寢床の上に立上つて、握つめて居た指環を投捨てた。

それは最早や、本物を連れて來るから、用は無いといふ意氣組で。

だが、扨て、連れて來る其困難は言ふまでも無し。來てから此處へ住馴れるであらうか、我に又馴染むであらうか、植木を枯らし、飼鳥を殺す、我の手並に行くであらうか。權藏が第二の心配はこれであるのだ。

表かしながら、彼の人とても、情を知らぬ草木ではあるまい、詞の通ぜぬ禽鳥でもあるまい、權藏が戀の世の常ならぬを、說いて說いて說き明かして、これ程までに戀に焦がれて、實にこれ程までに戀慕うて居るといふ事を聽かしましたら、よも動かれぬ事はあるまい。ゆるす限りは打解けて、此所に暮らして呉れてゞあらう。屹度それは然うあるに相違な

い、たしかに然うだ、それは極めておかう。

權藏ばすべての事を、すべておのれの意の如くに解いて、それで獨りで安心して、いでや澄子の迎ひにと、三崎で盜んだ小舟の此所まで乘つて來て岩陰に繫いであるのを、急いで纜を解放した。飛乘るや疾き、既に艪を取つて、えんや、えんや、船歌どころか、何處までも、えんや、えんや、えんやッさ!!!

《七》歸路

冬の夜の月の物凄きまでに照り冴えて居るの時、葉山の彼方から逗子の此方へ、切開いたる新道を辿つて來る二人連。崖の側を歩くのは、二重外套を着て、帽子覆ひを眼深に冠つて、僅かに顏を現はしては居るが、時々月を見るので、其鼻下に髯のある如何にも立派なる紳士たるが分る。海の側を歩くのは、これも吾妻コートと頭巾とで包まれて居る、品

位のある婦人。これは常に下を向いて、足元に氣を注けて進むので、其面を伺ふ事は出來ぬ。

二人は道を離れて行つた、けれども、それは、生憎道路が悪かつた爲で、平かなる處へ行けば、影法師は一個に合して、風も吹かぬに二重外套の袖はめくれて、吾妻コートの袖も連れて涙立ち、そして足並もゆるやかに急ぐとしも見えぬ。

漁村は人の寢るのが早いのに、別して冬の夜、殊に此新道。人通りは皆無である。電信柱の影と、松の木の影と、そして此二人の影と、それのみである。

「如何だ、好い景色だな、海上の月の影が碎ける處は。最少激烈に涙が荒れると未だ奇觀だらうが、何んと言ても逗子の入江だ。丸でお姫樣見たやうなもんだ。遠洋航海などに行つて印度洋上の月なんぞゝ來るとゝ、それァ大したものだが……」

立留つて二重外套は言つた。

「妾は最う海は大きらひ……どんなに月がよろしくッても」

吾妻コートは斯う答へた。そして矢張下を向いて居る。

「海がきらひ……では困るなア、海軍士官の妻が海がきらひでは困るぢやないか。逗子に飽きて東京へ歸りたいものだから、又そんな事を言出したのだな」

矢張立留つた儘で紳士は言つた。そして長い息を海に向つて吹いた。

「未だ貴郎は醉つて居らッしやいますね、最上樣ではいつでも御過しなさるから……妾が最う好い加減においとま申しませうと存じましても、中々御立ちなさらないのですもの」

「好いぢやないか、最上が酒好きだ、奥さんは話好きだ、お前が氣がねをするにも及ばんで……」

「あれ、氣がねを致すのでは御座いませんが……早く歸つてやりまん

と、おたるや老爺が、淋しがりますから……」

「淋しがッても好いさ。然う、度々、海賊が這入りも爲まいからね」

「這入らないとも限りませんから……」

「まア好いさ、此景色を御覽よ。海の景色を……え、海軍士官の妻が海がきらひでは不可よ。え、澄子……」

「海軍士官を良人に持つて居ますのですから、海がきらひでは悪ふ御座いますが、其海では一度死掛けた事も有りまするし。又其海には、海賊が居りますから……」

「海賊が何んだ……それァ最う水上警察へも然う言つてあるし、鎮守府へも屆けてあるから、此近海は充分警戒してあるので。なアに、何んの事があるものか」

「ですけれども、妾は此間で最う懲りましたから……」

「それで東京へ移轉説が此間から出て居るのだね。それも宜しい分つ

ては居るが……いつまでも水兵練習所へばかし行つて居やァ仕まいし。近々又乘艦を命ぜられるかも知れん、又次第に由ると新艦受取りの回航員にでも任ぜられて、外國へ行かぬとも限らぬのだ。其際だもの、最少しの辛抱だ、此所に居るが好いぢやないか」

「それは無理に……とは申しませんが」

「それを押詰て行けば、矢張り無理になるのだ」

「ですけれども……」

「ですけれどもの次ぎには矢張り逗子引拂ひ論が出るのだな。はゝゝ……」

「御笑ひなさッては困りますよ」

「笑ひません、それでは其代り、當分、逗子を吾艦は抜錨しません。なにお前、海賊なんど……お前に此間位の氣性があるからには、私は安心して居るよ。短銃一挺、彼れがあるから最う澤山ぢやないか。

ま、それより海を御覽、船が一艘此方へ來るよ」

「最うよろしい、それなら東京へ歸らうとは申しません。もし貴郎が御乘艦なさるか、回航にでも御出で、なされば、如何しても此逗子には居ません」ので、いづれは生家の方へ參るやうに成りますのですから、それまで辛抱して居りませう」

澄子は何氣なく斯くは言つた。けれども内心は決して何氣なくは無いのだ。

「それだ、それだ、其事だ。又外國へでも行くやうになれば、半歳以上は別れて居なければならんのだから、それまでの僅かの間だ。貴重なる日數だ。今と爲つてお前が東京へ行つたら、私も東京へといふ譯にはいかんので、矢張横須賀に下宿でも仕なければならぬのだ。然うして貴重なる日の數を、二人別々に爲つて暮らすといふのは……はゝ、お前には出來るかね、私には出來んよ。船に乘つて出て仕まへば

格別、陸に居ては迎も出來んね」

森戸繁は笑ひながら斯くは言つても、心中決して笑うては居らぬ。

「それは、貴郎……妾でも……」

「然うだらう、然う分つて見れば、最う何も恐るべき者は無いではないか。海賊が來やうとも、何が來やうとも……」

「ですが、貴郎、御當直の夜だけは、誰か人を泊めて……それで有りませんと如何も妾は……」

「其人の適當なのが有れば好いが……それよりは、人の代りに、彼の短銃があるから好いじやないか。彼で、這入つて來たら構ふ事は無い、撃拂つて遣るさ」

「妾には、そんな事は出來ませんわ。貴郎は妾を水兵と一所に御見なさるからいけません」

「なに、撃てん事があるものか。引金さへ引けばズドンと出る」

「妾に撃てますなら、狼籍漢を殺しますより、自分で死んで仕まいます」

「えらい覺悟だね、しかしそれは、ほんの杞憂で、然うたびく賊が這入るものじやないさ。安心して居るが可い。まア海でも御覽。あれ、先程の船が、最う川口まで來たよ」

「あの船が彼處へ參るまで、此所に斯うして立つて居たのですよ。まア永い事。さア早く歸らうじや御座いませんか」

「でも此所は最上さんの家とは違ふから、座を永くしても遠慮するには及ばんさ」

「貴郎は御酒か次第に冷めて參りますから、此所で風に御當りなさるのはよろしいでせうが……」

「おう、これは失敬、さぞ寒かッたらう。さア行かう」

再び二個の影は相連なつて、そして新道を川口の方へと歩んだ。

電信柱の影、松の木の影、それは歩まぬ。元の通り地上に殘つて居る。それに又思ひも寄らぬ、岩の影がゆら〳〵がゆらめき出て、前の二個の影を追ふて歩き出した。

路の回はつて月が横から射した時に見れば、岩にはあらぬ人だ——岩に似て居る人だ——權藏に似て居る人だ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

如何して彼の二人の中を裂いて一人を奪うて安房へまで走られやう。全く乘ずべき隙が無いのだ。繋がつて居る二個の影法師、其睦まじきを如何して破られやう。東京灣の入口を一飛のやうに仕て此處まで來たのも、彼の時の勢ひが拔けて仕まつて、ぐずり〳〵と今日此月夜まで、手も出し得ずに過したのは、我ながらの不勇氣無氣力。家の外をぐる〳〵と夜もすがら廻はつて居て、二人が散歩に出れば晝となく夜となく後を追うて、殆ど一分時も遠く離れぬ。これ程までにして居りながら、今更

おくれを取るといふのも、あまりの二人が睦まじさ。嫉まぬ妬まぬ唯綺麗に羨ましい、と權藏は考へた。

此儘にして我は歸つたものか、すご〳〵と我は鬼ケ鼻の岩窟へ引取つたものか。扨て、それで、濟むものか、濟まぬものか。

權藏の影は殊に痩細つて地には寫る。それは思ひに窶れたばかりではあるまい。これは彼の如く二重外套を着て居らぬので、又帽子も冠つて居らぬので、薄着のまゝの夜歩きに、無いやうでも寒風の吹込む肌。さぞ、寒からうが、それは感ぜぬ。前の如く心に樣々と考入りたる權藏であれば。

勢いが次第に拔けるやうに、此戀の心が段々とおとろへて呉れば、諦めやうもあらうもの。戀しい心は益々募つて耐えがたい今日今宵。それであつて思ひ切つた事の出來ぬのは、不思議だ。募れば募る程勇氣が出て、どんな事でも仕通すといふべきを、これは其反對に出るとは、譯が分ち

ぬ。屹度其間に障害があるに違ひない。とまで權藏は考へた。

扨て其障害は何んであるかと、深く考へるまでもない――二人の睦まじさ――これだ、如何に戀に狂へばとて、此二人の睦まじさを見ては、如何して手が下されやう、と權藏茲に躊躇の念高まつて、思はず跡を追ふの足を留めた内に、二人は既に養神亭前の假橋の邊にまで進んだ。

けれどもそれが爲めに思ひあきらめて、此戀を絶つて仕まつたら、我は死ぬ方が倍しだ。如何で死ぬる我なら、此處だ、遣付けろ、我は海賊だ、おう海賊だ、然うでなくても、我の命は無いものだッた。

海賊だ、からには構はぬ。人に情けを掛ける事が、何んの遠慮な。人は我に情けを掛けぬ。遣付けろ、殺せ、彼の海軍士官。

御最期川に男を突飛して、女を引さらつて、然うだ、陸は抱へて奔り、海は船に載せて走る、譯は無い、今だ、此時だ。

權藏は疾風の如く二人の影を追うて走出した。

意外にも前面に當つて叫聲。それは二人に權藏が未だ追及ばぬ時だ。何事が起つたのかと立留つて、向ふを見ると、曲り角の河岸の處で入亂れる五六人の影。

「無禮な、何を爲るか」

これは森戸大尉の聲だ。

「何をするものか。ぐず〳〵言かすと命がねえぞ」

思ひきや源太の聲だ。

扨ては他の者は平六、與八、三平等か。何しに此所へ來た、先きの船が彼奴等であつたか、それが又彼の澄子に執念を殘して、今宵再び襲擊に來掛かる途端、此所で出會してからの騷動か。

我はどちらを助けやうかとは、此時一寸迷うた權藏の心の内。未だ決せぬ正面へ、走來る與八に三平。手を取り、足を持つて、連りに叫ぶ澄子を擔いで居る。跡には源太と平六との二人掛りで、森戸大尉と鬪つて居

る。

三度澄子を助けべき時は來つた。

突如三平を川の中へ蹴飛して、與八を地の上に撲き倒して、二人に何者たるを認められぬ間に、澄子にも誰やら知られぬ間に、權藏は戀人を促して。

「何しろ、あぶない、貴女は此方へ……」

手を引いて走らうとした。

「でも、旦那樣が……」

後へ氣を配るのを又强く手を引いて。

「旦那樣は大丈夫、貴女は御婦人だから……さア〳〵疾く疾く」

氣の顚倒して居る處を、疾く〳〵と急立て、益々深く考へしめず、能く見せしめず。何かなしに引張つて、假橋の前まで小戻りさして、此所から矢庭に澄子の躰を、羽織を脫いで肩へ掛ける如くに輕く擔いで、橋の

下に繫いである小舟に權藏は飛乘つた。

再び驚く澄子の、聲を立てんとするを防ぐ猿轡。穢い手拭ながら、ゆるして被下れと、權藏は心の內に拜みながら、嚙ますれば、手を以て拐り取らうと急る澄子。嗚呼此手も縛らねばならぬ事か、御免なされ、御免なされ、と小聲で言ひながら、繩で、とは思へども、痛々しくて火急の場にも、それは出來ず。よんどころなく、自分の三尺帶を解いて、後手に引縛れば、縛られながら水中へ飛込まうと爲る澄子。權藏いよ〳〵困つて窮して、最う此上の手段は無し。ぐず〳〵して取返へされては、千日の萱の、それである。苦しからうが、痛からうが、少しの間ぢや、御免なされませと、何處までも詫びながら、板を脫して胴の間の空溜に、狹くてならねば逆樣に澄子を入れた。双の足は上に出て居ても、手が自由を得ぬので如何する事も出來ぬ。此上へ自分の筒袖脫いで冠せ掛けて、身は寒中に丸裸。滿潮に乘じて橋杭の纜を解きかゝる、上には、三四人

の足音して、走つて通れば、少しおくれて又一人の足音。踏拔くばかりに板を鳴らしながら。

「何處へ連れて行つた。悪漢めら。ど、どこへ行つた澄子――」

正しく森戸大尉、狂亂の如く呼はり〳〵、逃ぐるを追うて走り過ぎた。

此大尉が聲は權藏の腦天から足の爪先まで響いたからには、空溜の中の澄子にも無論能く聽えたらうが。猿轡の、如何しても嚙切れぬに、喉まで聲は出て居ながら、堀井の底から屋根の上の人に答へるやうで、是れぞ口惜しさの最高極度。

《八》苦船

橋の上の激しき足音が全く聽えなくなつたのを待つて、月を避けたる暗所から滿潮に乘じて漕出す小船。川口から入江へと瞬く内、大漕ぎに漕ぐ櫓の働きは、權藏の力の限りで、寒中の夜風に裸躰の身にも、龍卷一

面の背の刺青に、汗は月を受けて珠の如しだ。

川をさへ出て仕まへば、海上は此方のもの、水雷艇で追掛けられ〳〵ばいざ知らず、誰が船を出さうと櫓を取らうと、拔かれて何んとせう、龍卷の權藏だと、益々大漕ぎに漕ぎ出して、待て、しばらく、空溜へ逆樣の憂目を見る彼の人を、兎にも角にも起して上げやうと、櫓を櫓綱に二卷き三卷きして、急いで先に冠せた筒袖を取去つて、澄子を抱起す權藏。何はなく唯何んとなく、むら〳〵と彼の人の頰に此方の頰を押着けて見れば、這は抑も如何に、烈火の如く熱し。逆樣にしたるからに血の上つたので、畫間見れば紅のやうな顏色であらう。

濟まぬ事だ、氣毒な事だ、痛々しい事だ。せめてはとて猿轡を取つて進ずれば、齒で唇を傷けられたのか、血は少しく手拭を染めて、豆絞りの淺黃の、朱に替りたる處がある。權藏は其儘取つて向鉢卷とした。

既に猿轡を取去つても、聲を立てぬ。立てゝも及ばぬと諦めてか、又立

てるだけの氣力が無いからか。

此分では手のいましめも解いて上げよか。さぞ、痛からう、困しからう、と恐る〳〵これを繙いた。けれども最う如何しやうとも爲られぬ。

氣を失つたのも同樣、月に向けて寢かすれば其通りにして居り、涙に向けて轉がすれば同じく其通にして居り、そして眼のみは時々開きつ閉ぢつ。

不意の出來事にあまりの驚愕。それの未だ治まらぬ内に、縛められて、逆樣に釣るされたるさへあるに、大漕ぎに漕がれて、船に暈ふて、それで澄子は此有樣。如何する氣力も無い悲しさ。

權藏にはそれとは知れぬ。怒濤天を衝くの中でも、平氣で乘廻はすおのれを以て人を計るので、船暈とは思はぬ。唯逆さにしたのが悪かつたと思つて居るので、心配も心配、だが、又、船から水中へ飛込まうとせられぬだけ安神で。好いわ、介抱は後にゆつくりすると、寢かした上に筒、

袖を着せ掛けて、三尺帶を疊んで水垢取の上に載せて、枕にあてがうて、これで好しと艙に歸つて、再び大腰大漕ぎ。出れば出るだけ沖だけの風が吹き涙が立ち、涙の光る時、船は沈んで、船の光る時、涙は沈んで、次第に遠し逗子葉山。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

櫻鼠色のお高祖頭巾は破れて、疾くに脫げて、亂れた黑髪の下に縺れたやうに爲つて敷かれて居れば、媚茶の吾妻コートは數ヶ所が裂けて、下に着たる風通の華美なのが能く見える。絹足袋は無慘、泥土に塗れて、紺の剝げた程に染まつて見えるので、白さは其脛の色に殘るばかり。水垢取を枕にして板の上に轉がつて居る澄子の上には、霜が薄からず降りて居るので、これを朝日影に隈なく照らすに連れ、解けては袖の雫となり、流れては涙の露と爲る。このいたましさは誰が仕だかと見入る權藏の心には、前に畫いた空想の、奪取つて連れて來る時は、どんなに嬉し

いであらうかと、樂しみにして居た情を悉く打消して、嗚呼、誠に濟まぬ事だ、我は其上もない悪い事をしてのけた。

相より房に渡る海の上、此所が名代の荒瀨戸であるから、權藏は昨夜からの漕ぎづめを續けて、少しの間も休む事は無い。

草臥れて腕が扱けるかとおぼえる時には、櫓を放さず、胴の間の澄子が寢姿に眼を遣る。すれば、氣毒だ、嗚呼、氣毒だ、昨夜から手荒な事を仕つゝけだから、酷く弱つて御座らッしやる、早く連れて行つて介抱をして上げなければ、此儘に死んで仕まはれるかも知れぬ。折角折取つた高峯の花を、持つて來るまでに散らして仕まつては成りませぬ。少しも早く、それ、鬼ケ鼻へと、此心再び權藏の腕を強からしめて、漕ぐわ、漕ぐわ、櫓首の折れるまでに。

其漕ぐたびに、船が左右に首を振つて、浪より上の激しい動搖。これが苦しくて弱つて居る澄子が此樣とは權藏悟らぬ。

澄子は、恐ろしさ悲しさ口惜しさ苦しさの、それからそれへと移りうつりて、何事も他は思はなんだのが、夜の明けるに隨つて、何者が妾を勾引して、何處へ、何しに連れて行くのかといふ念の、起らぬでもないけれど、船の動搖に、頭腦痛みて、胸先苦しく、眼眩み、耳鳴り、ふら〳〵と天上に釣上げられるかと思へば、切り放されて地獄の底に突落されるやうな心持して、手を動かすも、足を延ばすも、寢がへり打つも、むか〳〵として苦しく。迚も起上るなど、思ひも寄らず。這は、何の日まで海の上にある事か、何の所まで船にて行く事か、心細さ言ふばかりなし。

其内朝日の光りを得て、見れば、龍卷の刺青したる大男。誰あらう、いつぞやの海賊の一人——恩人、二度の恩人、昨夜又三度目の恩人は、仇であつて、妾を一人船に載せて何處に連て行くのであるか。賣るのか、廓とやらに。將た、此人の宿に引かれるのか。何者なるか漕ぐ人の知れ

ずに居た時の心配よりも、一層の憂慮、胸に充ち來つた時は、海の一入荒き瀬戸で、船暈の苦しさも一方ならぬ折とて、思切つて身を起して、海へ投じて、身を殺し、今の苦痛と、後の耻辱とを、共にのがるべきかと、澄子は考へた。

考へては居ても、如何しても身を起す事が出來ぬので、それを強て起して、好しや船端に手を掛けられやうとも、彼の力の男に抱へられては、迚も本意は達せられまい。又其水に飛入り得ても、泳ぎ上手はいつぞやで知れて居るに、再び救ひ上げられるは何よりも明かな。あら、如何とも仕難きは、身を縛められたる時と異ならず。

此上は如何にともせよ、船中にてのくわだて思留つて、陸へ着いてからの、其時の此方の覺悟。飽くまで逃がさじとならば、飽くまで逃げ通して、されば、逃げ通して逗子までは歸れずとも、身を殺すに邪魔のなき處までは必らず〳〵屹度走らう。それにしても、偖て、何處へ此船は。

《九》 寒苦鳥

船を鬼ケ鼻へ漕着けて、澄子を岩屋の中へ抱入れて、其袖を命に掛けて攫んだまゝ、權藏は其處へ倒れて仕まつた。澄子は未だ涙の上に居るやうで眼眩のするに起つ事も成らず。これも共に倒れた儘、眠るともなし、睡らざるともなし。

死人も同然に爲つて船に暈つた澄子は、船を漕ぎづめにした爲に疲勞した權藏の睡眠より早く眼の覺めて、此所は何の國か、人の住む個處のやうにも無し。これぞ鬼かと疑はるゝ海賊供の家か。遁れ出て走るとも、活くべき路とてはあるまいが。操を破られぬ其内に、身を殺すべき淵はあらうに、さア此人の眼の覺めぬ間にと、立上らんとして見れば、彼の手は、袖を攫んで、指を切らずば、放つまじき力の入れ方。

澄子は仕方なくて、上の吾妻コートを密と脱ぎて、これならば好からん

と、見れば、コートの下の羽織から衣服から、下着を通して襦袢の袖までも力の入つて居るのに、如何とも仕難し。此上は一息に振切つて、駈出して、椽側から飛降りると仕やうぞ。海に溺れて死に得ずとも、岩に碎けて命は失やう。然うよ、其事よ、と澄子が力の限り引取る袖。めり〳〵と綻ぶるに驚かされて、勃然と起上つたる權藏。常に此家の疊の上、此邊にうたゝ寢して、夢にばかり見て居た人が、現在今こそ思ひ通りに、おのれの傍に有る嬉しさ。其嬉しさは又夢の、搔消す如くに失せる時の、それを學んでか、袖を振りほどいて、逃げやうとは仕て御座る。安心の油斷は誠に大敵、これまでにして居て逃げられては、何んとしやうぞ。雎鳩が魚を攫むが如くに澄子を捕へて、權藏の聲は太く高く甲走つた上に顫へながら。

「こ、これ、御新造、今更逃げやうとは、あんまりだ。まァ待つて被下い、如何したッて逃がすものか。最う此所まで來たからには、身動き

一つ爲せるこッちやねえ。えい、ま、そんなに私を恐れなくッても好い。私は彼の四人のやうに、手荒な事は仕やァ爲ねえ。仕たのは此所へ連れて來る爲で、他に手荒な事ではお前さんを苦しめやァ仕やせんから……えい、ま、私の腹を一通り聽いて被下い。耳をしばらく貸して被下い。御新造、拜みます、此通り男が頭を下げて、手を合せて拜みます。貴女がいつかの時、私を拜みなすッたが、其拜まれたのを恩に着せて、此方の拜むのを酌分けて被下いと言ふ譯ぢやァねえ。一度、二度、三度の、彼の時の事を恩に着せて、無理に聽いて貰ふのぢやァねえ。一度、二度、三度、これが四度目の災難だと思つて、靜として居てまァ聽いて被下いまし」

舌の爛れるまで說盡して、これならば言殘した事の腹の中には綺麗に無いといふ處まで說いて、聽く人の腑に無理に落して、鐵石よりも堅い胸元を貫き通して見せるべき、時は今眼前に來つて居るのだ。權藏と澄子

との間には何の障害も無いのである、前には浮島、それを越しては海原、其先きは三浦の山々、其先きの逗子の別莊、此間が二十何里と隔たつて居て、遠く〳〵離れて居て、夢にばかり、覺ては如何する事の出來なかつたのも、今は現在此所にある戀人。逃げやうと仕かけたのを、去ッかりと捕へて、抱へて、動かさず。聽かぬと言ふても强て聽かし得られる此場合、思ふた事悉く打明けて、一方ならぬ戀の心を、語る期會は、今、今、今なるを、如何したのか、語れぬ。灰で繩を綯ふやうで、水で球を結ぶやうで、自分の思想を、自分の舌の先きに掛ける事が出來ぬ。情けなくて、口惜しくて、ぶる〳〵と身を震はして、癇癪を起して。

「ま、何んにしても、御新造、殺されたものと諦めて被下い。鱶に見込まれて殺されたものと思つて、ね、鱶といふものは執念深いものだ、私は鱶より未だ執念深いかも知れねえ。御新造、これ程までにして、這んな目に御遭はせ申すのも、見込まれたのだから、仕方がない。諦

めてね、此所に居てせえ被下れァ、それで好いのだ。逃げちやァいけねえ、逃げ出しちやァ成らねえ。唯只此所に居て被下されァ、それで好いのだ。其代りに、非道な事は仕ねえ、力づく、腕づく、おどかして以てお前樣を困らしは仕ませんわ。覺めねえ夢の凝結と爲つて、消えねえ幻の形象と爲つて、此所に居てせえ被下れァ、何んの最う指一本出しませうぞ。それは最う、それは最う一生懸命、何んでもお前樣の言ふ事を聞て、どんな事でも致しまさァ。大の男がお前樣の自由に爲つて働きますよ。お願ひだ。此所で思出しちやァいけねえ、兩親の事だの、旦那の身上を……それは最う忘れて仕まはなけれァ成らねえ、お前樣は一度死んだものと思つてね、此所に、いつまでも、いつまでも、居て、私を助けて被下いまし、よ、御願ひだ、よ、よ」

勢ひに委せて如何やら斯うやら、心中の萬分の一を說き了つて、がッかりした風で口を結んだ。

澄子、これを耳にして、つら〳〵考へるのに、扨ては身を賣られるのか操を汚されるのか、と思つて居たのは取越し苦勞で、此人は斯うした戀に苦しさの極、妾を此所へは連れて來たのか。良人ある身に横戀慕、あまつさへ勾引して、かゝる荒磯に誘ひ來つて、共にいつまでも暮らせとは、非道ならずして無禮ならずして暴逆ならずして、何とかすべき——なれども。此戀世の常の戀ではない。殊に生命を助け呉れたる恩人、災難を救ひ呉れたる恩人、言はゞ此人に命と操とを守護せられた爲に、今日まで無事にありしもの。それを思へば、無下にも斥けられぬ彼の願望、ゆるすべからざるをゆるして、此所に少時は落着くと致さうか。如何で今は死ぬるに死なれず遁るゝに遁れられぬ身上であれば。

「それ程に……それ程に妾を何して……唯一處に此所に居るだけなら……」

「へえ、へえ、それァ居るだけで……もう其居てさへ被下れァ、逃て

さへ被下らなけァ……」

「それならば妾は最う、死だものと思つて……」

「居て被下るか、難有い、有難い、難有ふ御座います」

嬉し氣にさも〳〵嬉し氣に權藏が此時の顔。

偖て此所に留るべき身と定まつたかと思ふと、如何にも亦心細く悲しく、思ふまいとは思つても思出すのは、兩親の事、良人の事、逗子の空をいつ見る事が出來るかと考へ出して、俄に岩屋の物淋しさに、澄子は突如として。

「それで、何時まで居たら、歸らして呉れるの？」

今までの嬉し顔が忽ち變つて、權藏は早や血眼になりながら。

「何時まで居たら歸して呉れるたァ、飛んでもねえ、歸へすものぢやァねえ、そんな譯ぢやァねえ、私が死ぬるまで歸すもんぢやァねえ。それとも、たつて歸りたいのなら、私を殺してから其上でね、御新造、

殺して被下い。殺してから歸つて被下い、私は殺された方が未だ好いので……あれ程までに言つたのに、未だ分らねえやうでは、最う如何したッて仕方がねえ」

と言放つた。

澄子はうろ〳〵しながら。

「あれ分らなかァないの。分つては居たのだが……」

「分らないのだ、矢張り分らないから、何時歸らして呉れるなんて言つたのだ。いつまでも、いつまでも、如何か此所に一處に居て被下いと、あれ程までに賴んだぢやありませんか。それを承知したものが、何時歸らして呉れるとは、あんまりだ、私の言ひやうが未だ足りなかつたのか、それでか、それならば最一度委しく繰返して……」

「いえ、最う澤山……好いの、分つて居るの、それが、つひ、不意と出たのだから」

「無い事が不意と出るものぢやァない、腹の中に有る事が出たのに違ひない」

「なんのそんな事であるものかね。最うそんなに心配しないで……」

「いや〳〵心配しないで如何するものか。命を投出しての今度だ。折角此所まで漕着けたものを……油斷をして居る内に逃られぬとも限らぬ。いくら此方から大騒ぎをして居ても、お前さんの方では、間さへ有つたら逃げやう〳〵として居るのだもの……」

「それは最う逃げ出されたら、妾は逃げぬでもないわ。だけれどね、斯うしてお前の心を聽いた上ではね、よしんば間があつても、如何も逃げる譯には參らぬのだから、最う其方は安心して……お前の方で無法な事さへお仕でなくば、妾は死んだものと諦らめてね、お前の言ふ通りに、いつまでも〳〵此所に居るよ。だから最う、疑らないでね……」

「それは、それとして、聽いておきます。けれども私は安心はせぬ、何處までも心配だ。疑らないといふ譯には行きませんわ」

「然うお前の方で疑がッてだと、妾の方でも疑ぐるよ」

「それは如何して……」

「妾を安心さしておいて……無法な事を御仕掛けでないともね、其所は分らないからね」

「なんでそんな事を、仕やァ仕ませんわ」

「それ御覽、お前も疑がはれると厭だらう」

「むゝ……」

「妾も疑られちやァ厭！もう〳〵お互ひに、それは止してね、今日から妾は……此所のね、かゝりう人だからね……」

死んだつもりで、思切つての澄子が言葉。權藏、涙をこぼして、喜びのあまり、澄子を抱上げて、神輿のやうに擔いで、座敷中を彼方此方と駈歩いた。

《十》 新境遇

安房の國は水仙の名產地、鬼ケ鼻の岩屋に澄子の留つたのは、思ひも寄らぬ個所に咲く一名花。さりながら濱風に吹きさらされて、打萎れて、いたましや病に伏し、枕も上らず、床にのみ、五日ばかりは碌々食事も仕なかつたので、其間の權藏が心配、これ又一方ならぬもので、夜の目も寢ずに看病した。

まめ〳〵しく働いて、それよ、これよ、と勞はつて呉れる權藏の、優しき程尙あさましくおぼえて、大江山の昔思合せては、しくり〳〵と泣くばかり。何んの因果で、此憂き目見る。

富山の伏姫は馬琴の筆に生れて、世にあるべき事ならずと思つて居たのが、これは相手の犬畜生ならぬ差はあれど、同じ岩屋住居の悲しさ。死

んだものと思つても、生きて居る身の思出さずには居られず。泣かじとしても涙の出ずには居ぬに、傍へ附切りの權藏に見られては、又彼此と言はれるゆゑと、呢と耐ゆるになほ更つらくて、眉まで蒲團を深く蒙れば、巽の臭氣鼻を衝いて、これが海賊の香といふのであらうか。

荒壁、丸木、綴疊、家の内の飾りとては何んにもなく、有るのは鐵砲や荒縄やら大刀やら、熊手鍵の折れたのやら、探闇燈の壞れたのやら、外國船からでも盜んで來たのか、唯一個の油畫の額は、縄で結んで床の間らしい處に釣下げてある。

其額の畫は、愛らしき乙女が、軟かき草の上に横になつて、入江の海を後にして、手に草花を弄して居る圖で、格別名畫とも思はれぬ。

ゑかし、其後景の海が、如何にも逗子の入江のやうに思はれるのと、かゝる恐ろしき岩屋に、彼の畫の乙女も、此方と同じく捕はれて居るのかと思ふと、同情淺からず催ほされて、なつかしさの念抑へがたく、常

に常に其額をばかり見詰めて居た。

此處に來てより七日も立つたかと思ふ朝、少しく心持の好いので、起上つて椽側へ出て見ると、下は恐ろしの崖、崖の其下は、大岩小岩を芥の如く打寄する荒浪。

恐ろしさに又眼の眩みかけた時、臺所で食事の要意して居た權藏、飛込みは爲ぬかとの心配に驅られて、走つて來た。

澄子は權藏が心を汲んで。

「大丈夫、決して妾は短氣は起さないから……最う妾は死んで居る者だから……」

此一語が權藏には如何にも嬉しく取れたと見えて。

「それで私は安心が出來ますア」

とほく〳〵打笑むで、不圖向ふの海原、浮島の方を見ると忽ち、驚く事其頂上。物をも言はず、矢庭に、一刀を横へて、鐵砲取りて、彈丸を

こめ柱がはりの松の枝に倚つて身を乘出し、此方へ漕來る一艘の船、乘組四人の男に眼を配つた。

血相變じて權藏が沖の方に眼を配る、それに驚かされた澄子も共に椽側から向ふを見渡せば、其所に一艘の輕舸飛ぶが如く、四人の腕に櫓を操つて、此方へ來る樣子。扨てこそな、仲間の者は歸つて來たよ。それを待うけるに、銃丸は何事ぞ、刀又は何んの要意ぞ。

訝かしきは權藏の擧動と思へど、言葉も迂濶に出しかねて、澄子は茫然たる其内に、近寄る艪聲、人顏も定かになれば、それは源太等の四人ではなくて、鮪漁の流し繩を揚げて、漁夫が加知山へ歸るのであつた。

權藏勢ひ拔かして、銃も刀も投出しながら。

「何んの事だ、馬鹿々々しい、仲間の者かと思つたら……」

澄子は恐る〳〵問ふた。

「もし、仲間の人であつたら……」

「仲間の奴等が歸つて來たのなら、片ッ端から殺しッちまう」

「それは又何故……」

「彼奴等を殺しッちまはねば、安心が出來ませんわ」

「そんなに心配なの？」

「心配も心配も權藏には大きな心配二個……」

「それは何々で二個……」

「一個は其、仲間の歸つて來るのが心配」

「最一個は……」

「お前さんの逃出すのが其一個」

と言つて、澄子の顏を權藏は見詰めた。澄子は見詰められるのを厭うて横を向いた。

「何んにしても、此所まで起きて來られるやうに爲つたのは、結構だ。寢てばかり居なすッては、碌な事は考へられねえから、さア、ま、一

通り此岩屋を見ておほきなせえまし」

權藏は斯う言つて、澄子を導いた。

案内するは海に望む室、則ち澄子が今まで寢て居た室、此處は十疊、此次ぎの室から始めた。

其所は六疊で、戸棚があつて、圍爐裡が切つて有つて、薄暗くて、天井が低い。

其次ぎは臺所で、此處は全く岩をくり拔いて造つたので、岩を穿つた天窓から烟を出し、流シ元の水落しも同じく小さな岩穴で、此處から直ぐに海へと流れ込む仕掛、岩清水を湛へる岩窪の溜には、常に小さな瀧の形を爲して落ちて居るなど、誠に奇異なる臺所ではある。

それから又元へ歸つて、十疊の間から南手の出入口を降りて見ると、其處は岩組の突兀たる間に、松のくねり〳〵生じて居て、其間に二坪三坪ばかりの平地があつて、それを傳うて行く先きには、見上げるばかりの

絶壁、翼のなき者はこれから先きへは行かれぬ。此絶壁を以て人界との區劃としてあつて、海からでなくば誰も來られぬのである。又海からでなければ誰もが去られぬのである。

此處へ案内して、これを示した權藏の心は、澄子には分つて居る。逃走の望みを絶たしめる其爲にといふ事。

更に權藏は先きへ立つて、澄子を導くは絶壁の根下、其所には井戸の如き洞穴、物置倉である、それを見せた。

恐る〳〵覗いて見れば、底は眞暗で何も見えぬ。これで全く岩屋の住居の内外を見て了つたので、これより他に世界は無い、これより他に人類は居らぬ、唯權藏との二人。東京から來て、逗子の濱邊を淋しいと思つたが、逗子から此所、此所は扨て何といふ地名やら、それさへ知れぬ濱邊へ來て見れば、其逗子よりも淋しさ越して、心細さ限り無し。あら悲しやと思ふ念の、腦の一隅に起つたかと思ふと、忽ちにして、くら〳〵

と眼暗み、澄子は得堪えずして其處に倒れた。

權藏は驚いて、抱起して、肩に擔いで、そして急いで元の臥床へ、連れて歸つて、濡手拭で額を冷やすやら、頭を揉むやら、まめ〳〵しく働いて。

「未だ本統に氣持が治らねえのに、方々を歩かしたから悪かッたのだ。勘忍して被下いまし、だが、又それにつれて、種々の事を思出しては いけねえ、尙又病氣が悪くなるばかりだ」

誠に種々の事を考へれば、病氣をして益々重からしめるばかり。最う決して思ひますまい、考へますまい。思はず、考へず、我を忘れて居たならば幾分か壽命を保つて、其内には又逗子へ歸られる期會を得ぬとも限らぬ事、果敢なさと謂へば此上はなき果敢なさをたのみにして、恙がなく、日を暮らさうよと、氣を取直す傍に、看病の權藏、不思議や不意に起りて、澄子の左の手首を強く握つた。はッと驚いて、澄子が見る權藏

の顔には、微笑を含んで、常の樣にも無し。何を爲るのかと恐れおのゝきながら、手を搔卷の袖の中に引かんとすれば、動脈の留まるまで握締めて、放たず。彼此する間に冷やかなる物を、紅さし指にするりと嵌められた。

見れば、いつぞや、取去られた指環、それを元に復へしたのであつた。

「正物さへ來て居れァ最う指環なんかに用は無いのだ。嵌めて嵌まらぬ物を持つて居やうよりは、以前の指へかへしますよ」

言丁つて權藏は手首を放した。

嗚呼なつかしの此指環！これは結婚の約の定まつた時に、繁樣から贈られた指環。今我が手に復つたのは嬉しいが、此指環の指に復つた如くに、妾はいつ逗子へは歸れる事か。なつかしの指環とて、打蒙つた蒲團の中、權藏に知らせず接吻した。幾たびか血に染まりたる寶石へ。

これより二日三日、又枕を離れず、少しづゝ粥米はすゝりたれど、鶯の

餌は鶯の食たらず。海賊の手鍋わざ、姫の喉に如何でかなふべき。

あはれ同じ囚虜の油畫の女は、つらしとも、うしとも、思はぬか、妾は無二の友となすなるに、其方よりは何故妾を慰めては呉れぬかなど、かこつも亦詮無き一個。美しくかざり立てたる室にてすら、十日あまりも打伏せば、寢厭きて、住み厭きて、見るもの、聽くもの、悉く飽きて、軸に、額に、置物に、生花に、取替へばやと思ふが常なるを、これはあまりの無造作荒づくり。無味此上もなき室の事とて、唯一個の畫の額を、見厭きる念は中々以て生ぜぬ。

戀人に逃げられるのが苦勞に爲つて、伸間に歸られるのが心配に爲つて、鬼夕鼻の岩屋から一歩も踏出し得ぬ權藏。澄子の顔ばかり見て他に異も無く暮らして居たが、或日突然。

「少しの間の辛忍だ、ゆるして被下い」

と言ふかと見れば、不意に起つて、澄子を臥床の儘搔抱いて、裏の方へ

廻はつて、彼の絶壁の根下の洞穴の中へ、擔ぎ入れて。

「一人で置いては稼ぎに行つても心配でならねえ。留守の間に四人の者が歸つて來ては大變だから、それで此所へ入れて隱したので……辛抱して被下い。又……もしや短氣な事を爲れやァ仕まいかとの心配もあるからでだ。必らず悪く思つて被下るな。これ程までにして出て行くには、よく〳〵の事があると思つて貰ひませう。其代りには、歸つて來た日には、それは〳〵喜ばせる事がありやすぜ。それを樂しみに、一日か、一晩の、辛抱だ……此所には、それ、有りッたけの蒲團を前方運んで敷いてあるし。又炭火の要意も仕てあるし、餅もある、菓子もある、水もある、茶もある。但し燈火だけは御免だ。これで如何か音無しく留守をして被下いまし。大急ぎで歸つて來やすから……」

斯く言つて權藏は、此所に澄子を置いた儘、繩階子を釣上げ、入口の戸

を締めて、錠を下し、足早に走り去つた。

地獄の底に到頭墮ちた澄子は、一時は氣を遠くした。眞闇なる洞穴の中、ではあるが、時の經つに從うて、薄明りに四邊を見得るやうに爲つて、此物置の入口の狹きに似ず、內部の意外に廣き事、其廣き中には、米俵やら、炭俵やら、其他いろいろの品物の積重ねてあるのに眼が着いた。盜品の隱し場所と爲つて居るのであらう。扨て身の周圍には、何時の間にやら運ばれて居た疊表。其上へ蒲團が敷いてあつて、岩疊に穴を穿つたる火爐には、炭火が熾してあつて、其傍には食料飲料不自由なく備へてあつた。

岩屋から洞穴へ移つた時は、東京から逗子へ移された、其頃の情と異ならぬ。

逗子から名の知れぬ地に連れて來られて、又此地の底に移されて、後には何處へ身を持つて行かれる事か。

あはれ彼の油畫の少女にも別れて、一人此所に住ふのか。今の淋しさにくらぶれば、好ましからぬ權藏とやらの、彼にても居て呉れたら未だ好いもの、常に枕邊に居ては蒼蠅くおぼえたのも、斯う爲つて見れば何程かなつかしい。それ、彼ですらこれぢやもの。眞人なつかしからずして如何しやうと、悶えながら左の紅さし指、それを右の手で指環の上から握締めた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

澄子は穴の中に寢もやらで一夜を明かした。外には朝日のきらめくかと思ふ頃に、入口の錠を外す音。もしや仲間の者とやらが、歸つて來たのではあるまいかと、身を縮めて隅の方に、小くなつて居る處へ、繩階子は上から下げられた。

これを傳うて降りて來るのは權藏であつたので、やれ先づ一方の安心は出來た。

やれ〳〵窮窟な目に遭はしました。さァ彼方へ、と伴はれたので、蘇生のおもひを以て穴の外へ出て見ると、一時に太陽の光線を浴びたので、映しくて急には眶が開かれぬ。やうやく光に馴れて、元の眼に復した時には、權藏に手を引かれて、元の座敷へ最う歸つて居たので、これはと見れば、不思議や、昨日までの室の樣にも無し。蒔繪の手文庫、硯箱、朱檀の小机やら、手箱笥やら、又鏡臺針箱のやうなもの、眞鍮の耳盥まで殘らず持運んで並べてある、加之皆見おぼえのある品ばかり。殊に驚かるゝは、黑人が楯を持つて居る形の目覺シ時計、讀掛けて其儘の草双紙、紙の栞の入れてある儘。彈馴れたる二絃琴に琴柱の配りたる儘。これはと驚いて澄子は、少時言葉を放ち得なかつた。

「如何ですえ、喜ばせるとはこれで……わざ〳〵逗子まで行つて、危い處を潛つて、お前さんの家からね、やッとの事で運び出して、船へ積んで持つて來ましたよ」

何から何まで注意して、此所へ運んだ其中に、寫眞帖の無いのは如何したのか。彼の中には良夫の眞影のあるものを。

前の世の事を忘れよと言つておきながら、手馴れた品を再び見せるとは、罪よ。思ひ出さずに何故居られやう。逗子の我家にまで行つたとなら、彼方の樣子も少しは知れて居やうものを。聽く事も出來ず、愁るに斯かる物の無きこそよけれ——とは思へども、亦有るも遺がに嬉しからぬにもあらず、兩樣のおもひに結ばれて、面には浮立つばかりの喜びは見せなんだ。

それが權藏には不服である。さぞ非常に嬉しがるであらうと、其笑顔を待構へて居たのであれば。

「如何ですね。これなら少しは氣が落着くでせう。ねえ。御新造……」

これですこしは此所に居心が好くなるでせう、ねえ……」

住み馴れよとての心からで、これ等の事は爲されたのであらうが、寧ろ

澄子には歸心を急ならしめたばかりだ。

權藏が持つて來たのは、此他に何處で奪つたのか、葡萄酒に菓物の壜詰、いろ〳〵の鑵詰物等、次の間には山の如くあつた。

《十一》 二絃琴

澄子が權藏を懷かしき者に思ふたのゝ、洞穴の底に居た僅かの間ばかりであつた。室を飾られた手道具を見るにつけて、益〻戀しき逗子の住居、良人の傍。思出さじとしても思出さずに居られるものでなく、忘れやうとしても忘れられるものでない。忘れずに、思ひつゞくれば、いよ〳〵病をして重からしめて、又起つ事も能はざるべく、知らぬ岩屋に埋れる事かと考へれば、殘念口惜しく、それよりは氣を取直して、身を健固に持つて居たなら、盲龜の浮木を得ぬとも限らぬ。思ひますまい、思ひますまい、權藏が强て不敬を加へぬ上は、此方からも許す限りの情を見せて、逆らはぬ覺悟が第一と、これからは聽き馴れたる自覺シ時計の音に起きて、必用からの炊事わざ、權藏の腕前と似たり寄つたりの間ながら、女は女だけの働きを臺所に見せるので、權藏の喜びは一方ならず。此上の心配は、四人の仲間の歸るのばかり。一個の方は先づ安心と、氣は緩めぬど口には言つて居る。人は何事か爲さでは居られぬもの。さびしさに、つれ〳〵草讀み、源氏物語讀み、時には二絃琴をも彈じる。譯分らずに權藏は耳を傾けて、煩惱の犬は菩提の鹿。これを聽いて連りに悅氣して居た。鏡臺はあれども、これに向ふて髮梳づるも物うくて、塵の積る儘に捨ておき、針箱は取出して、これも消閑の物縫。海賊の綻びをつくらうも緣。

此處へ來てから一月も經つであらうか。最う正月の來る時分と思へど、軒の松に讓りて、門松の要意もせず。あはれ又新しき衣を着るべうもあらずと思ふ折柄、權藏は岩風呂を沸かしたれば湯浴せよと勸めた。それ

は定めて心持がよからうと、臺所に行つて見れば、これは如何な事、岩の窪の浴槽の如き中に、大釜で沸かした湯を湛えて、岩室の温泉も斯くやと思はれた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

湯より出れば、久々の湯浴とて、其心持の快さは、氣も遠くなるばかり。瓦人と新婚旅行の時は櫻月。熱海に入湯の昔思出されて、茫として居る内に其日は暮れた。

椽側より居ながらにして釣上げた黒鯛を鹽燒にして、これを肴に葡萄酒を傾ける權藏。浴後の心地好さに、これも盃に半分の葡萄酒を味はうた澄子、興といふ興にあらねど、二絃琴を取出し靜に須磨の曲を彈じはじめた。例の如く權藏悅に入つて、眼を細く、口を結び、時々眉を震はせながら、感入して聽いて居る内に、醉の廻はつたのか、膝の上に頬杖のまゝ、とろ〳〵と眠りかけた。

權藏に聽かせる爲の二絃琴でない、おのれの苦悶を遣る爲めのであるから、彼に構はず彈じて居る内、頬杖脫して權藏、轉がりかけて、不圖眼を覺し。

「あゝ夢か、夢で好かつた。夢が覺めても、お前さんは此處に居てだから好い。先頃までは夢が覺めると、お前さんの姿は消えて仕まつて、つひ傍に居た人が二十里も先きに隔たつて仕まつたのだが……此頃では消えもせずに、矢張り傍に居て被下る。嗚呼權藏が一生涯中、一番今が嬉しい時だ。如何か此樂しさを、私が死ぬる端まで續けたいものだ」

と言つて、はら〳〵と涙をこぼして。

「泣上口と笑つて被下るな。今悲しい夢を見たからで……」

「どんな悲しい夢を見たの」

と澄子は問ふた、二絃琴の手を留めて。

「どんなと言つて、それァ實に情けねえ夢だ。お前さんに取つては都合の好い、喜ばしい夢であらうが、ま、聽いて被下い、斯うだ。お前さんの旦那の森戸大尉が、測量艦に乘つて此近海へ來て、圖らず此岩鼻へ上陸して、私を彼の物置の中へ突落して、其間にお前さんを連れて、逗子へ歸んなさッた、其夢を今見ました」

と言つて涙を拭ひ。

「もし夢が本統だッたら、如何しやう。それを考へると最う泣かずには居られねえ。這んな弱い權藏では無かつたが。愚痴に涙をこぼすやうに爲つたのも、全く御新造、お前さんからだ、悪い人に見込まれて、お前さんも災難なら、悪い人を見込んだ私も災難だ。戀慕ふ事の出來ぬ人を戀慕つたのが、此方の悪いのとは知つて居ても、それが諦められるものぢやァねえ。嗚呼苦しい戀だ。悲しい身上だ」

と權藏は語つて、淋し氣に微笑しながら又詞を次ぎ。

「龍卷の權藏が一代の意地を纏て掛つたので、兎にも角にも此處までは漕付けて、此傍にお前さんは居るけれど、あかし又考へて見れば二十里も遠く隔たつて居るのと、あまり違はぬ。先きにも言つた通り、夢が覺めて見ても姿は消えずに此處にある、其段は嬉しいが、實は形ばかりで、心は消えて居るお前さんだ。差向ひに坐つて居ても、其間には海もある山もある。大きな〳〵隔絶がある……けれども、これを取退けるとなると、然うすると、それ、最初の約束を破らねばならぬやうに爲つて、たッた一時の嬉しさの爲に、一生の樂しみを失くして、お前さんを死なせねばならぬのだ。其處は權藏何處までも知つて居る。心得て居る。だから、決して狼藉は仕ませんわ。其代りには、くどい奴だが、私が死ぬるまでは傍を放しやせんぜ。海賊の稼ぎに行かねばならぬやうに爲つたら、又例の穴藏へ入れて、好うございますか、こればかりは堅く言つておきやす。私の息のある内に逗子へ歸らうといふ

心は、微塵も出す事は成りませんぜ……さァ最う好い、又二絃琴を、それ、聽かして被下いまし」

覺悟の上ながら、これを聽いてからは、澄子が空想の、逗子へ歸られる期會が來るやうに思はれて居たのが、忽ち消えて、酷く情けなく爲つて來た。權藏はいつ死ぬる。此身はいつまで生きるものか。何の日に逗子へは歸られやう。嗚呼、とばかり、泣くに泣かれず。是非もなく更に義甲の筒を指には嵌めたが、細い糸の音の益々細く、地の底の蟲の音の如くに。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「歸つて來たぞ、權藏」

「燈火を見せろ、早く」

「大島へ吹流されて居て遲く爲つた」

「岩角から、それ、繩階子を……」

源太、平六、與八、三平の聲々——岩鼻の下に響いた。

權藏は醉眼を活と見開いた。

澄子は驚いて、二絃琴の手を留めた。

「しッ、矢張彈いて……大事の處だ。搆はず彈いて居ないと疑はれる」

と權藏は諭いた。心も心ならぬ澄子は、戰慄の手を糸の上に載せて居るので、曲の外の餘音が幽かに鳴つて居る。

「さッ、此處が大事だ、さァ彈いて……」

言ひつゝ一刀脇に指した權藏、外へ踏出しかけて。

「賴む、彈いて……」

恐る〳〵何か分らぬ手を搔鳴らした。

下からは口々に。

「好い音が爲るぜ。此奴は不思議だ」

權藏は無言で裏の戸を開いて、岩に忍ぶ足音。外は眞の闇。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

澄子は一心に二絃琴を彈じて居る——外には、浪の音、松の聲、人の叫び聲、太刀打つ音。

「おのれ友達を……だ、だましたな、仲、仲間を賣つたな」

「何をくそッ!!!」

「我達は手前を捨てぬのに、お前の方では我達を……」

「何を、くそッ!!!」

「友達四人が大事か、女一人が大事か」

「何を、くそッ!!!」

「殺されるものか、うぬ一人に」

「何を、くそッ!!!」

丁々發矢の亂れ合ふ中に、切々ながら此言葉の飛ぶ内に、叫聲、鍔音、

次第に衰へて、後には全く止んで、松の聲、浪の音——二絃琴の音は幽かにいと幽かに。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

血に染まつて一度岩屋の内までよろめきながら、歸つて來た權藏は、わなゝく澄子の手を取つて倒れて。

「逗、逗子へ歸る、時、時が來やしたぜ、喜ばッせ……私、私も、喜んで、死、死ぬる。とう〳〵意地を貫いて、死ぬ端までお前さんを、私の傍へ引寄せて居た。無理と知つて、無理を通した。お前さんは操を立て通した。それで好い、最う死んでも好い、お前さんは何歳までも、榮えて被下い」

と言切つて、すッくと起上るや、澄子の手を放し、今まで彈いて居た二絃琴を取つて、抱き締めて。

「海賊の最期、こ、こ、こんなものだ!!!」

椽側から飜筋斗打つて海中に飛び込めば、朱に染まつた飛沫の岩屋の内の澄子の傍まで跳ねて、凄まじいかな水烟。

《をはり》

畫師の戀

其一

山は悉く綠の色。巖も苔衣に包まれて、新夏の景色は谷の偶々までも行渡つた。扨は白晝聽く杜鵑の聲に、初蟬の音の搔消されて、馴れし樵夫も炭燒も一時に耳を傾ける、處は大和の十津川鄕、玉置山の南麓に月輪村とて、浮世に忘れられた山里。唯其琴柱の瀧の奇觀を以て、鬼通路谷見物の文人墨客に、漸く立寄つて訪はれるばかり。年の內に一度か二度はそれでも靴の足跡を、細徑の粘土に印する事があらうかも。これも多度より折立へ拔ける間道傳ひに、立寄つた瀧見の旅人であらう。琴柱の瀧を正面に見る處、其所の岩の上に腰を掛けて、一心に水の落下するを見て居る一人の若者。年の頃は十八九、少しく髮の毛の延びて居

るは山中の旅行に久しく剪髪せぬ故であらうけれど、櫛の用意の有つてか、水で分けたる形も殘つて、塵に未だ穢されず。生毛は如何ならむ、髯の無き口邊すべやかに、色は飽くまで白くして、唇には咲殘る躑躅の花瓣を含みたるかと思はれる程、紅の一點は萬の外景を引立て、都に出しても人後に落ちぬ美男。

此人の持物としては、象皮の脇提革包、疊床兀に寫生版と旅行用の繪具函、一人には勝つた荷物である。

琴柱の瀧は一名を二の瀧とも呼んで、名の如く一派の河流が、眞中に大岩の出て居る爲に、二方に分れて落下して居る飛泉。すべてが綠の色の中に白雪を吐出す其奇觀は、青空に白雲の簇がるのに比すべきか、又青簾の前に白衣の神女が立つて居るのに較ぶべきか。

若者は持物の上から見れば、正しく畫師。然らば此所で寫生でも爲るのか、但しは、腦裡に印し、眼底に刻し、以て畫想をたくはへるのである

かと思へば、然うではなくて、其の獨語に「あゝ、何を見ても悲しく爲つて來る。何故此樣に思切る事が出來ぬので有うか……琴柱の瀧の奇觀を見て、束の間だけは忘れて居たが、瀧口までは一所に流れて來た水の、岩の爲に兩斷せられて、右と左とへ別々に流れるといふのに思至つてから、不意と又想が他に轉じて、洋畫の方で新派と舊派と分離するのも、此樣な譯であらう、とまで考へたのは好かつたが、其内又考へが一變して、私と彼の戀人とは、小供の内からの仲好しで、此歲まで親しく睦まじく、成長なつて來たのに、不意と脇から惡魔の樣な奴が出て來て、横取をして仕まつた、戀人を奪はれた、それは此西岡薪舟の一生の幸福を奪はれたのと同じ事である。此戀を引裂かれたのは、丁度彼の瀧の二ッに別れて落ちるのと同じ樣だ、と思出したものだから、さア悲しくつて仕樣が無い……何を見ても、彼の人の事を思ひ出すのだから、仕樣が無い。いくら忘れ樣と思つても忘れる事が出來ぬのだからなァ。人は思つ

て居やう、知らぬ人は思つて居やう、西岡薪舟は畫想を練る爲に旅行したと……それは大きな間違だ。自分は失戀の苦痛を忘れる爲に、此山奥へ入つたのであるが。何處へ行つても煩惱が附纏ふて、嗚呼苦しい、實に、悲しい、男らしくも無い、思切れぬ事か」

其二

琴柱の瀧の二派に落ちるのを見ては、戀を引裂れた口惜しさを思出して、悲歎の涙を絞つて居る西岡薪舟。失望から來る痛苦を忘れる爲に、山又山と分入りて、旅に心を遣るつもりで有つても、枝面白き立木を見ては、連理の樹の契りを思ひ、聲優しき飛禽を見ては、比翼の鳥の睦まじさを考へて、片時も無想の域に達したる事は無い。

それも其譯であらうか。爰に西岡薪舟が失戀の歴史を語つて見れば、實にもと思はれる節の少からず。恐らくは誰もが同情の涙を濺ぐに躊躇は

爲すまい。

薪舟は東京青年畫會の内でも最も多く望を囑せられて居る畫家である。住居は麻布の霞町の高所で、極めて見晴の好い家。父もあり、母もあり、兄は陸軍大尉とやら。薪舟は末の秘藏子であるが、子供の内から身躰が虚弱であつたのと、天性として畫筆を持つのが好きであつたのとで、十二の秋の事、當時むらさき派の泰斗といはれる海上孤帆の門に入つて、本年十九歳まで勉强して居たのである。

西岡の隣家で、庭つゞきで行かれる所に、遠縁ではあるが親類の吾妻といふ家が有つて、其所に政子といふ娘があつて、薪舟と同年であつて、そして矢張子供の内から畫を好いて、二人で遊ぶ時には、何日でも仲好く人形を畫いて居た。

薪舟が女の樣に優しい如く、政子は男の樣に强くあつた。それで仲の好いのは、これが其反映の妙でもあらうか。何んにしても筒井筒、振分け

髪の頃からの仲好しで、薪舟が孤帆の門に入ると「薪さんがお出でなさるなら、妾も如何か」と兩親に組つて、間もなく跡から政子も弟子入りして、通ふのにも必らず一處、歸る時も必らず一處、一人が休めば、一人も休んで、時には合乗車で通ふた事もある、其十二、十三、十四の頃までは。

薪舟の心の内では、何となく彼の政子が、自分の妻となるべき者と思はれて居て、終生苦樂を倡にするのは、必らず彼の政子であると定めて居た。斯くあらねばならぬ運命の下に、最早や出雲では結ばれて居るやうに考へて居た。扨又恐らくは政子其人も、同じ心で居るであらうと思ふて居た。それは加し大いなる誤認であつて、政子は意外にも他に嫁した。最も意外にも、師たる海上孤帆の許へ嫁したのである。

薪舟は悲しさ口惜しさ其無念さ。大恩ある師を戀の敵として恨まねばならぬ。何んたる不幸な事であらうか。菩薩の面を蒙つた惡鬼は、掌中の

玉を奪ふて、我を浮む瀬の無き深淵の中に蹴落して、そしてから〳〵と打笑ひて、天の一方に登り去つた。嗚呼、と悶え苦しみ、居ても立つても安んぜられぬ樣に爲つて、扨てこそ薪舟は旅へ出たのだ。其旅へ出る時に、黒雲に駕したる惡鬼が、一少女を抱き、一少年を蹴つて瀧壺の中へ陷らじめたる圖を殘して、そして東の都を立去つた。

其三

一たび戀人のつれなさに遭ふてからは、浮世の人のすべてが悉く自分に無情である樣に考へられて何故に斯く人々は、我を苦しむるや。如何なる惡因有つて此惡果を得るのであらうかと、西岡薪舟は絶えず疑問を抱いて旅を渡つた。

東海道は滊車で走つて、伊勢に入つては腕車を驅つて、そして志摩にさまよう頃から、とぼ〳〵と徒歩を始めて、長汀曲浦、南伊勢の海岸を傳

ひつゝ、紀の路に入つて、更に道を轉じ、靜八丁の奇景を見てから、本朝の桃源、それは此所ぞと銘を打たれた大和の十津川鄕に、草鞋の跡を附したのは即ち今日。しかしながら看來る山河の絶景にも、深く刻まれた失戀の傷を醫する事が出來ずして、何處まで行きても忘れる事の出來ぬ悲しさ。嗚呼女の熱情知らぬは、櫻に花なく、柳に葉なく、梅に香のなき唯の梢よ。稚きより友として、中頃より戀人として、末は妻ぞと定めて居た人でさへ、つれなくも我に此痛苦を與へるのに、況してや他人の如何でか我にあはれみを掛けやうぞ。路を紀に取り、和に入るまで、一人旅の宿は御無用と、到る處斷はられて、詮方無さの草枕。旅のあはれを一入知つて、山ふところの岩の陰、眠れる顏に一雫の、露は涙に和する時、初めて蘭花の匂を悟り、水のほとりの柳の下、踏のばしたる足の先きに、枝を折つて甲斐なきを覺ては、啼く川千鳥の音に飽きて、誰か都の戀しくあるまいか。

鯨寄する濱邊の砂、狼吠ゆる山中の岩、蓐とも爲し、枕とも爲し、星に辿る燒野に雉子の音、月に歩む蘆間に田鶴の聲、或は猿の峽中に叫ぶを耳にして、照射の火を見る凄愴は、何として我を泣かしめざらん。腸はすん〳〵斷、更に又分々裂。

里の掟、これ昔より今に至るまで破り難きは、一人旅を泊めぬ事。其譯聽けば無理にもあらぬ、醫者賣藥の無き僻村。萬一の事出來ては迷惑と、深き慮はさる事ながら、我を一人旅と思ひ居るか、我には失戀の痛苦といふ同伴が、何處までも〳〵附添ふて、離れゝばこそ、去ればこそ。

嗚呼、これが彼の政子と新婚旅行の一着として、共に倶に畫版を携へて、分入つた山中の旅であつたら、如何であらう…… 其樂しさは。

斯く思ひ亂れて居た西岡薪舟は、袖に涙の落ちる時、氣を取直して「これは不可、餘程長い間考へて居た。又もや今日も暮れかゝつたのに、此所に斯うしては居られぬ……」と言ひつゝ、重き荷を肩に掛けて、肌馴

れた岩から立上つて、琴柱の瀧にも、いざ、さらば。岩には苔が蒸し土には草が生じ、路といふ路までも緑の色なのを踏んで、一二町北の方に進めば、這は如何に、瀧の下流の谷川に出て、渡るに橋無し、飛ぶに岩無し、素より小舟の有る筈も無し。これはとばかり途方に暮れて居る處へ、絶壁に沿ふた淵を繞つて、怪巖の上を越す瀨に連れながら、伐つた儘の杉の大木二本、未だ筏には組めぬ溪流、此儘北上川まで流して、それから熊野川へ出すといふ丸太の上へ、筒袖皮袴の一人の若者、鳶口を持つて乘つて居る危さ。これも世渡りと感心して見て居たが、幸ひなのは彼の人、それよ、賴んで、向岸へ渡して貰ひませう、と聲を限りに「おーい-」と呼んでも、水の瀨音に搔消されて、先方へは達せぬらしい。止むなく帽子を脱いで打振つた時、漸く彼に通じたと見えて、鳶口でヨイと岩角に引掛ければ、長さ丈餘の木材が、くるりと方角を變じて、一直線に此方の岸へと來る。すべて其疾い事、阿吽の呼吸で足りるので

ある。

其四

泊るに宿無し、渡るに舟無し。十津川山中の一人旅、此位心細いものは無いのである。谷川の岸で途方に暮れて居る西岡薪舟、好い鹽梅に木流しの上乘を見着けて、聲では通ぜず、手眞似でそれを招いた處が、直ぐと向ふで意を諒して、此方の岸へ着けて呉れて「御旅人、嘸困らッしやッたらう。向ふへ渡りなさるのに、橋が無くて嘸途方に暮れなさつた事であらう。好い所に私が杉丸を流して來たのぢや。若し來合せぬ時には二日でも三日でも、其所に立つて居なければならぬぢや」と親切を面にあらはして、斯う言つて。强力を腕にあらはして、木は水の瀨に連れて流れやう〳〵とするのを、岩角へ引掛けた鳶口で、一生懸命に留めて居る。

「誠に有難ふ御座います。此所まで來て引返へす譯にも參らず。如何したら好いであらうと、實に弱り切つて居たのです」「いや、此の間まで藤蔓で結んだ籠橋が有つたのだが、出水で流されて無く爲つて仕まつた。しかし、格別用の無い處だから、再び架ける事も爲ず、其の儘にして有りますわい、さァ乘らッしやれ、手が大分だるく爲つて來た」

言ふが儘に薪舟は、杉の二本組んだる上に飛乘れば、早や鳶口を放して、瀨の流れに委せる——疾い、疾い、岸で見るより身が其上に乘つて見た方が餘程疾い。岩に當れば岩を碎く勢ひ、杭に當れば杭を折る勢ひ、渦卷く深淵に浮む時は、走馬燈籠の影繪の舞ふに身を比すべく、瀧爲す急湍を走る時は、丸胴提燈の火心の轉ぶに命を較すべし。危さは言はん方なく、はらッ、はらッ、と思ふ間に、トンと強く何物にか衝突した。これは失策！と思ふたは束の間で、直ぐと薪舟に嬉しき情が起つたといふものは、首尾好く向ふの岸に着いたのを知つたからで。

「さァ上らッしやれ、眞向ふへ着けて進ぜやうと思つても、此樣に川下へ流されるので、氣毒ぢや。さァ其所の岩で膝頭を打たぬやうに、それ、其所の又苔の上で滑らぬやうに。どれ、私も一寸岸へ上つて、烟草一服と仕ませうか」と薪舟を先きに、若者は後から藤蔓を手に取つて、岩の上に飛上り、松の根に結付けて、木材の流れぬ工風を回らし「これで好いわ」

陸上にも同じ伐り轉がしたる杉の大木七八本。其上に二人腰を掛けて、薪舟はピンヘッド。若者は燧袋の中から、椿の葉と刻莨とを出して、くる〳〵と程好く卷いて、一服吸ひつゝ「時に御旅人、これから何方へお出でなされます」と問掛けられて「されば さ、何所へ參つたら好う御座いませう」

其五

自分の行く先きを知らぬといふ、妙な返辭に驚く若者「これは可笑しい、何處へ參つたら好う御座いませうなどゝ、他人に相談を掛けたッて、それは分りませんわ。全躰、まァ、どの見當へ行かッしやるので」

薪舟は少しく迷惑の顏で「全くは何處へ行つても好いので、はい、何んでも山の深い處で、人間の緣の遠い處でさへあれば、それへ向つて參ります」と答へた「山の深い處で、人間の緣の遠い處と言へば、此十津川鄕の中でも、月輪、日輪、中立村、村といふのは名ばかりで、山又山、隨分世の中から離れて居るが、未だ〳〵此先きには果無山の果てもなく、仙ケ嶽、東屋嶽、天狗嶽、地藏嶽、大日嶽、釋迦ケ嶽、七面山、彌山、小篠山、國見山から大峰の方まで續いて居て、たしかに其邊は人間の緣は切れて居るが、しかし、何んで御座りますぞ、これから行けば行く程

人家が無く爲つて、泊る處がありませぬぞ」「いえ、其所ですよ。私は志摩から伊勢、紀伊から此大和路へ入つたのですが、道路家がありましても、泊る處の無いのは同じです。はい、一人旅は何處でも泊めて呉れません。ですから、泊る處の無いのと同じ事です。家の無いのと同樣です」「成程此邊の風習で、一人旅は泊めません。けれども、食物は賣りませう」「や或る處では接待に只呉れました」「それ御覽なさい、人家があれば食物だけは有りますが、此先きになれば何も無しです。木の實一ッ有りませぬぞ。直ぐと餓死するか、貴郎が擄槌（蛇の一種）に血を吸はれるか、山犬に肉を咬れるかの內で、それは〳〵恐ろしい事です」

「私は、其方が好いので。私は、自分で自分を害する程の勇氣が有りません、けれど、誰か他から來て殺して呉れば好い、殺して呉ればと好いと考へて居る時なのですから、恰度好いのです。殺して貰つたら。私の苦痛が無くなるのですから」

あまりに妙な事を言ふので、若者は薄氣味悪く感じて來て「それで、貴郎は失禮ながら、何を職と爲つて居る方ですか」と足の先きの草鞋の泥から、頭の頂きの髪の塵まで、見上げ見下して問ふた。「私は畫師です、西岡薪舟と言ひます」と、節の無い、調子も無い、投出した樣な聲で言つた。

「畫師ですか、貴郎は畫師ですか」「然うです」「それなら、賴みましたら繪を畫いて呉れますか」「それは上げます」「願はれませうか」と若者は急に乘地に爲つて「先きを急がぬ貴郎の旅なら、如何でせう、私の家へ御逗留なさつて、ゆる〳〵と足を御休めなさつて、其上で望みまする繪を御畫き被爲つては呉れませぬか」「一人旅の私を、彼の、泊めて呉れますか」「それは泊めて上げますとも。私は葛城三郎と申す者で、此川下の神山と申す處に先祖代々住つて居りますが、……十津川から熊野へ出ても、亦芳野の方へ出ても、畫工といふ者は一人も居ない土地で

す。それに今日貴郎にめぐり合つたのは、多年の本望を達しる時が參つたのです」「熊野から芳野までの間に一人も畫師が無い如く、一人として此あはれな旅客を泊める者が無い中に、貴郎は、私に、ゆる〳〵と、逗留せよとまで言つて被下るか。嗚呼實に忝けない、謝します、謝します」「おかし、貴郎に取つては半里ばかり逆戻りをなさる樣になりまするが」「何、貴郎、行方定めぬ旅ですもの」。

其六

再び杉の大木の上乘をして、谷川を下る事十町の餘。銚子口といふ難所の手前にて留まり、左岸に上つた西岡薪舟。葛城三郎は藤蔓で杉丸を岩角へ繋いでおいて、翌日又流すと捨言葉。鳶口を肩にして先きに立つて、すた〳〵と登つて行く、九十九折。これでも馴れた人には、苦もなく歩かれるが、薪舟には中々以てつらい事。

平地とては無い十津川郷の事とて、家は悉く山の中腹に建てられ、前から見れば二階立、後からは搗釜小屋の軒低きに似て居るのだ。それが軒並びといふよりは、椽並びといふが適當のやうに、山の上から下まで段段に爲つてかたまつて居る、二軒、三軒、或は五軒、六軒。十軒からある處は大部落の内に數へるのである。一村一家、珍らしく無い事だ。

日も夕方、そろ〳〵薄暗く爲つて來たので、薪舟の眼に能くは分らぬが。神山村の葛城三郎が住居は、前面の谷を石垣で築き上げて、無理ではあるが平庭を造り。後面の山を削りて、三棟に分たれた家の構へ、此村では第一の廣さ大きさである。檜皮葺、破風造り、風避けとも稱し氷柱釣りともいふなる、軒下、三尺の板圍ゐ。此郷何處にも見る一流の建築法其の形には外れて居ぬが、母屋を中にして離れ家の左右にあるは、珍らしく、扨は此村にても有數の家柄とは直ちに知れた。

鹿垣を繞つて、昔の山關の面影を留めたる小門を入れば。突然吠出す飼犬一頭。一方には主人の歸宅を喜んで、一方には見馴れぬ人の入來るを訝つて。

飼犬を制し、奴僕を呼んで、三郎は薪舟の足を清めさせ、母屋の内の一間に通して、圓座よ、鹽湯よ、其内には三足燈も出る。夕餉の支度早やとこのへられて、折敷の形殘る膳部に、木地椀竹皿、山菜に高野豆腐の白汁、かこひ芋の鹽煮、ハスに似たる川魚の丸燒など並べられて、一德利は水に似た酒にして實は酒に似た水、それも地酒を遠慮しての饗應、主人の注意至らざる無しだ。

床の間には煤に古びたる掛軸があつて、筆の主は誰なるらむ。

都さへさひしかりしを山里の
芳野のおくの五月雨のころ

と後醍醐の帝の御製をうつし參らせてある。其横手には、甲冑、弓矢、刀劍等が陳列してあつて、すはや事ありといはゞ、今の世にもこれを着

して、飛出るといふ氣が此邊にあらはれて居る。

壁も襖もすべて板戸で、鉋の無い時代に手斧で削つた樣なのが、黑光りに光澤を放つて居る、顏を寫せば、あり〳〵と見られる位。熊野から今日初めて、家の中へ入る事が出來た嬉しさもある事ながら、第一異なつた屋づくりを見て、薪舟は喜ぶと同時に、直ぐとこれを彼の人に見せたらばと思出して、又悲しくなる處へ、彼の三郎は大盃をうや〳〵しく、兩手で差出して「まァ、如何ぞ御すごしなされ。今に母親が御あいさつに參りまするで」

其七

葛城三郎の家には、六十餘歲の老母の他には、奴僕が三四人あるばかりで、それとても多くは主人と共に、山に入つて木を伐り、川に行つて筏を組み、家に居るのは稀であるのだ。故に、廣い大きな家の淋しさが目

に立つて、閑古鳥でも棲みさうに思はれる程なのが、薪舟に取つては喜ばしい、淋しいのなら何程でも好い。

東手の離家には老母が籠つて居るので、西手の離家の方を薪舟が占領して、此所に畫室を覺束なくも構へた。

朝出て晩に歸るべき三郎は、正午にならぬ前に歸つて來て、薪舟の畫室に入來つて「や、薪舟先生。最う今日は仕事を止めて歸つて來ました。貴郎も未だ御始めになりませぬな。如何でせう、今日はお互ひに御休みと致しまして、近所の古跡を御案內でも致しませうか」と言つた。

「いや、それは難有いが。しかし、久々で屋の棟の下に落着いたので、氣の張が緩んだものか、何んだか動くのが太儀に爲りました」と薪舟は言つた。

「あ、それなら如何か御ゆッくりと……又御供を爲る時が有りませうが、それは兎も角も、先生、貴郎はこれまでお出でになりますまでに、

種々珍らしい景色を御覽で仕たらう。それを御寫し取りに爲つて、澤山持つておいでゞせうが、それを拜見致す譯には參りますまいか」「そ、それは……」斯うなると薪舟は困るのである。畫を修業の漫遊は表面で、實は失戀の苦痛を忘れやう爲の今度の旅行。佳景に遇ふても實は寫生の筆を取らなかつたので、何も無い。景色は何一ッも無い。が、志かし、別に二三十枚の人物繪はある。チョーク畫、若しくは水彩畫の肖像、それは此所に持つて居る。それでも見せて御茶を濁さうと心に定めて「それは景色の見取圖も澤山有りましたが、荷に爲つて困りますから、途中から通運便で、東京へ出して仕まつて、此所には肖像畫より他には有りません」「肖像畫、それは一層妙です。實を言へば此樣な山の中に住んで居て、始終天然の景色を見て居る者には、畫中の景色はあまり感じが薄う御座りまするが。肖像畫は別けて好みまするで、如何か拜見を願ひます る」「あらたまつて御覽に入れる程の物でも御座いませんが、これです」

と言つて取出す畫帖。三郎は恐る〳〵受取つて、鄭重に一枚一枚開きて見しが「あッ、これは如何も……あッこれは如何も……先生、どれもこれも、皆、同じ人の顏ですな。十八九の美くしい娘御の肖像……あッ三十枚から有りますが、皆、同じ方の肖像ですな」

然り、同一の肖像なり。戀しさ限りなき人の肖像なり。無情極り無き人の肖像なり。現實の其人は我物にあらねど、理想の戀人の面影を我筆に寫すは自由なり。思亂れて寢られぬ夜半に、畫き出したは即ち是だ。

薪舟は少しく顏を赤らめながら「はい、三十枚ともに同じ人です」「それに就いて私は、奇態でならぬ事があります、私が東京へ參つた時、途中で見掛けた婦人がありました。それは九段の公園で、一度見たのです……一度見た人の顏を、今日まで忘れずに記臆致して居るのは、不思議な樣ですが、嗚呼、美しい、世にも珍らしい美人だと、其時しみ〳〵思ひましたのが、頭に殘つて居るので御座いませうが。其一度見た美人

に、此肖像畫は其儘です。はい、そッくりで御座います」「彼の九段の公園で……」「はい、左樣です。私は此肖像畫に其儘の美人に……ま、惚れましたのですよ」「えッ、彼の、此肖像畫に其儘の美人に……」「では有りますが、唯今では其方は思切りました、と申すものは、一度見た彼の美人に、瓜二ッといふ女を當村で發見致しましたからで」「して見ると當村には、貴郎が一度九段で見た美人に、其儘といふ娘が居るのですね」「左樣で……」「すれば此の肖像畫にも其娘は似て居るのですね」「左樣です、克く似て居ります。ねえ、先生、實は私の御願ひ申したいのは、其娘の肖像畫なのですが、如何でせう、其娘を、一度御覽においでなさいませんか、これから直ぐに……」三郎はきつい乘地。

其八

曩に三郎が散歩を勸めた時には、太儀だからと言つて拒んだ薪舟も、如

何やら今度は浮足に爲つて「それでは行つて見ませうか」「參りませうとも直ぐに參りませう。私が御案内致しまする」三郎はそは〳〵として先きに立つた。

行く道すがら、薪舟は考へて見ると、三郎が九段で見たといふ美人は、矢張り彼の我が戀人たる政子の事ではあるまいか。肖像畫に其儘の娘といへば、政子を見せれば此人の事だといふに相違あるまい。して見ると三郎も、一度は我が戀人に想を懸けた事があるのか。

今これから見に行く娘といふのも、肖像畫に克く似て居るとあるからは、政子にも似て居るに相違ない。三郎が一目見て、我が戀人を慕ふた如くに、我も其人を一見して、心を動かす樣な事は有りは爲まいか。

さるにても導かれて行く先きは、何處であらうかと、あやぶみながら辿るに、清き流れの獨木橋を渡つた處、石の地の分かぬまでに苔蒸したる燈籠並び立ち。木の質の知れぬ程に朽ちたる鳥居の道に跨がるのがあつ

て、これから先きは又登りの石段に、去歳の落葉の其儘に積重なり、山風吹颯せども拂ふ由もなく見えて居る。兩側には大いさ三抱も四抱もあらうといふ杉の大木、密々と山を封じて、日の光を全く通さしめず。梟が畫鳴くのは虚言かも知れぬが、啄木鳥の夜と思ふて、此中に入らぬのは事實だ。

これを登りつめた處に、芳野の子守の宮を小くして、それに三百年程の古色を掛けた樣な神社があつて、屋根の拔けて居る所は、蜂が巣を造つて穴を埋め、御簾の破れて居る處は、蜘蛛が網を張つて、綻を繕ひ。縁側に蛞蝓の跡、階段に蝸牛の殼。曲つた柱を支へるかの如く、梢の嵐の爲に倒れ掛つて居れば、傾いた軒の上に、誰が投げたか石瓦。雪の重みが加はつたら、最早や耐えまじふ見えて居る。

「いや、如何も、酷く荒れた宮ですね、何といふ神社ですか。斯う大破に及んで居ては、人の住んで居ぬのは勿論、神樣も如何やら御鎮座ましまさぬ樣ですね」と薪舟は言つた。

「いえ、神樣は勿論、人も住んで居るのです。加之彼の肖像畫に其儘の人が……此社は小門神社と申しまして、護良親王の御雨宿りあそばされたといふ御宮で、誠に由緒正しいものです。此御宮を是非國幣大社に進めまゐらさうとして、當社の社掌たる折立平内翁が、一方ならず奔走せられまして、東京へも請願に出られたので御座いますが、如何も思ふ樣に參りませんでした……其東京へ出られた時、私も他の用で上京仕ます事になりまして、一處に道中を致したのが縁で、今日まで行來を致して居ります」「それなら其折立とやらいふ社掌の娘御か……」

「左樣で御座いますよ、其娘の千浪と申しますのが、御話申した彼の當の人ですが……あ、あれ、彼所の御簾の陰から半分顔を出して……」

言ふや忽ち、三郎は、最早や眼中に薪舟を措かぬ。打捨て自分ばかり、小走りながら廻廊の方へ行つて仕まつた。

其九

「何んだ、馬鹿々々しい。飛んだ御突合をした」と薪舟はつぶやいた。そして御簾の陰から出て來た娘の方を、さも不平氣に見遣つた時に、一種の感がはしなくも薪舟の頭腦に響いた。

似て居る、如何にも能似て居る。三郎の言は事實だ。我につれなき政子の面影を、十津川山中の小門神社、此所に見やうとは思はなんだ。

さるにても、流石は十津川だ、又神官の娘だ。白の小打衣に緋の袴、垂髪にぼう〳〵眉毛といふ扮裝。何となく奈良朝の時世の樣な心持がして來る我も冠着て來ねばならぬ樣な氣に爲ると、薪舟は心に浮べた。

折立の娘千浪の傍へ小走りながら行つた三郎は滿面に笑を堪へながら

「今日は、御父樣は御留守で御座いますか」と問ふた。千浪もそわ〳〵しながら「はい、今日は小原まで參りまして、父は不在で御座いますが、

如何かまア御ゆるりと……」「今日は御裳束で居らッしやるが、御神事でも有りましたのですか」「はい、あの父の不在の時は、いつでも斯う致しまして、御供物などを上下致しまする」「あゝ左樣ですか。何んなら御手傳ひでも致しませうか」「それには及びません」「それでは御手傳はさせなさらないのですね。然うで御座りませうよ。いつも〳〵私が參ると邪魔になさるのですからね」「いえ、左樣な譯では決して御座いませんが」と言ひ掛けて、不圖此方に薪舟の立つて居るのに目を着けて、急に顏の色を朱に染めながら「貴郎は御連が御ありなさるでは御座いませんか」

三郎は振向きもせず「はい、それは有りますが……いえさ、それよりは何故私が參るたびに、邪魔に貴女はなさるのですか」と詰問ふた。

「其樣な貴郎御無理を仰有つては困ります。私は少しも貴郎を邪魔に致した事は御座いません」「本統に然うですか、屹度然うですか」「はい

……」「それなら私は實に嬉しう御座いますよ」

これを見つ聽きつした薪舟――嗚呼世の中に戀のなまめきを見せびらかされる程、下らないものは無い。殊に彼の政子に克く似た人と、にちやにちやされては、三郎が師の孤帆を見たやうに思はれて來る。

這んな處に茫然として立つて見て居る馬鹿があるものか、此さびしい山上の宮に、心と心と合ふた戀の、無上の樂しみに醉ふ二人を殘して、我は去るに加かずと薪舟、氣を利かして、急々と石段を降りて仕まつた。

其十

薪舟は其儘、神山村の葛城の家に歸つて仕まつた。暫くして三郎も歸つて來たが、格別失禮を仕たとも、氣毒であつたとも、思はないものと見えて、平氣で畫室へ入來つて「如何です、先生、克く似て居ませう。貴郎の御畫きなさつた肖像に、そッくりで御座りませう……さァ如何ぞ、

彼の通りの女を、直ぐと如何か畫いて被下いませんか。ねえ、先生」

「これは如何も性急だ、見たから直ぐに肖像が畫けるものでは無い。何度も〳〵寫生をして、其上で又繪料を塗るのに、好い加減手間を取るものだから、今が今といふ譯には……」「で、御座りますかなァ」酷く失望の樣だ。

「おかし三郎さん、今私が肖像を畫かなくつても貴郎は早晩、彼の人を家へ引入れて、樂しく暮らす事が出來るのでは有りませんか」と薪舟は言つた。三郎は眞赤な顏をして「如、如何して貴郎、そんな事が出來ますものか。彼の人の親は非常な頑固で……迚も及ばぬ戀で御座いますよ」と言つて、酷く萎氣た。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

菖蒲澤といふ處がある。山と山との間で、岩と岩との中に、清水が溜つて居て、橋には水草が多く生へて居て、岸には柳もあり、誠に閑靜なる

一區域。おかし、土地の人には格別に美感は與へぬのである、けれど他郷から來た薪舟には、大層氣に入つて、此所へ散歩のついでに來て、岩の上に腰を掛けて居ると、何んだか此儘息を引取つて仕まふ樣に思はれて來る。これが薪舟には氣に入つて居る點なので、今の身上では、誰憚らず獨泣くといふのが、一番薪舟には樂しいのである。

今日も來て、岩に肘を掛けて、草の上に身を横へて居ると、澤の方に當つて、水を渡る音が爲る。鹿でも通るのかと、太儀ながら首を持上げて見ると、それは彼の三郎が、背に千浪を負ふて、澤の淺い處を渡つて、此方へ來るのであつた。

見られては、此方こそ構はね、向ふが極りを悪がる事であらうと、薪舟は遠慮をして、岩の間へ隱れた。

斯くとも知らぬ三郎は、途中で立留つて「千浪さん、一層の事、貴女を負ふた儘、深い方へ歩いて行つて、淵へ沈んで死んで仕まはうか」と言

ふ顔の、水に寫つて笑つて居るのが、知れた時、千浪は平氣で「それが好いかも知れません」

其十一

三郎は「それでは死にませうか」と言ひながら、ざぶ〳〵と深い方へ歩み掛けるので、千浪は驚いて「あれ〳〵」と背の上で騒ぎ動く「あッさう暴れては危いではありませんか」「でも死ぬと覺悟を御極めなさつたのなら、危くも何も無いでは御座いませんか」「それが本統に死ぬる氣が無いからで……」「それでは矢張串戯で御座いましたのか」「左樣、其通り、未だ死ぬるには少しく早い……」

斯く戯れながら、三郎は千浪を負ふて、澤の淺瀬を渡つて、岸の菖蒲を押分けて、岩の上に千浪を下した。

「三郎さん、さぞ重う御座いましたらうねえ」

「左様さ、大森彦七が覺えた重さよりは、少しは輕かつた」「して見ると、妾は鬼女ですか」「まァそんな物だ。内心如夜叉外面如菩薩とは貴女の事だ」「それは又如何いふ譯です。早く聽かして被下いまし」と言ひながら、未だ水中の三郎の手を取つて引上ぐれば「濡れて居る、濡れて居る。足を拭かなくてはいけません」と言ひながら、蘆間の驚といふ見得で、片足を浮かせた。そして片手で手拭を腰から取つた時に、よろめきて倒れ掛つたので「おう、危い」と兩方が同時に言つて、肩を貸したのやら、肩を借りたのやら、どちらが先きか知るに由なし。

三郎は水を離れて、直ぐとやはらかな草の上に身を横へながら、千浪には背を見せつけ、指の先きで石竹の花をむしり取つて、言葉無し。

千浪は心配さうに寄添ふて「如何した譯で妾が内心如夜叉とやらで御座います。さァ三郎さん、聽かして被下い。妾は其樣な事を申されまして は、口惜しくつて仕樣がありません」と早や泣聲を含んで居る。

「其譯ですか……あらたまつては言れません……何處が如何してと説明かす事は出來ませんが、千浪さん私は何んですぜ、命を懸けて貴女を慕ふて居るのですぜ……貴女を私はどの位愛して居るか知れやァ仕ません、が、他に、私位貴女を深く慕ふて居る者があれば、それは私は其人に讓ります、しかし私は、どの位深く貴女を慕ふて居るかといふ事を、私の口から得語る事が出來ませんけれど、恐らくは私以上に、貴女を深く想つて居る者はあるまいと思つて居ます。これぱかりは、私が信じて居ます。妾の取柄はこれ以上には有りませんわ。それだのに、貴女は、それを少しも悟つて被下らずに、頗る貴女は私につれない……」

「それは御無理です。三郎さん、妾だッて、それは貴郎の御親切は能く分つて居りますが。それに對しまして、さも〳〵嬉いといふ風を御見せ申す事が、妾には如何も出來ないので御座います……ですから、貴郎が其樣に御疑ひなさるのでせうが能くまァ考へて御覽なさい、眞實貴郎の御

親切を妾が知らぬものと仕ますれば、何んで這んな淋しい菖蒲澤へ、二人で時々遊びに參るものですか。加之嚴しい父の目を忍びまして……」

其十二

「それですよ、それ程私を想つて被下る貴女が、如何も此頃は可疑いので……だから人といふものは、腹の中は分らぬものと、斯う考へて居るのです」「それで妾が內心如夜刃とか何んとか仰有るのですか」「まァそんなものです」「何故、此頃妾が可疑いのです」「如何も可疑いと、言ひますのは、いつぞや御宮へ、私の家に居なさる畫師の方を連れて參つてからで、それからと言ふものは、如何も貴女の擧動が可疑い」「それは貴郎の御僻見ですよ。何んで妾が……」「僻見なら僻見で好う御座いますが、如何か私の僻見に留まつて呉れば好いので……もし、貴女が、彼の人に——東京から來た彼の畫師に心を轉すやうな事がありま

すと、千浪さん、斧は木を斷る用にばかしは遣ひませんぞ」「ひえッ……」「私は常に斧を砥石に掛けて居りまする」と言つて、寢轉んで居たのが起上つた時の血相は、蛇が鎌首を持上げた風情でこれを見て驚いたのは、千浪よりは、岩陰の薪舟で、思はず身毛が悚立つて來た。嗚呼、何んとして、何んとして、我は我が戀人を横取した師の孤帆の如く、彼の戀人を奪ふ事が出來やうぞ。

とはいふものゝ、愬ひ千浪が政子に似て居る爲めに、我にどんな煩惱が起らぬとも限らぬ。又彼の三郎が嫉妬深き爲に、どんな間違ひが起らぬとも限らぬ。

これは我より身を引いて、安らかに彼に戀を仕遂げしむるに加かずと覺悟をした薪舟。折角宿り得た屋の棟の下、又出て行かねばならず爲つて、さして行く笠置あたりの山河に遊ばうかと、思ふた時に、前面の澤の渚では、鶺鴒一羽、急がしく飛んで風無きに動く菖蒲の花、露は落ちて水

馬を驚かした。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

理由は語らず、其翌日、何かは無しに芳野の方へ出立すると言出した薪舟。連りに三郎が留るにも關せず、荷物をそれ〳〵に取纒めた。

然らば、お願ひ申した畫の出來ぬかはりに、幾枚もある同じ人の肖像畫の内から、一枚でよろし、被下らぬか。彼の人に其儘なればとて、無理に其中から一枚を奪ひ去つた。嗚呼、眞の戀人は孤帆に奪はれ、畫の戀人は今又、三郎に取られた。

あはれ薪舟は神山村の葛城の家を立出で、又とぼ〳〵と一人旅。谷添の棧道を傳ひ行くを、村端れの鹿垣の果てまでは、それでも三郎の送つて來て、名殘はたしかに惜しんだ樣子。戀の熱を引去れば十津川鄕士の誠實なる點、明かに三郎にも認める事が出來るのだ。

棧道傳に神山村を立出して行く谷川の右岸左岸、それを縫ふ樣にして渡るには、杉丸太の獨木橋、危いものである。

五度六度までは薪舟、無事に陷んで渡つたが、七度目に逢ふた獨木橋は、塲所も悪し、木材も悪し。下の谷川も極めて深い。此所を獅子飛とやら名を呼ぶ難所、向ふの岸と此方の岸との間は、四間か五間であらうが、それは双方から其所のみが、岩角の出張つて居る爲に、狹まつて居るので、水に近寄るに從ふて下の方は開いて居て、恰も甲州の猿橋のある深谷も斯くやと思はれる。が、危險は彼よりも一層の上にあつて、架けてあるのは杉丸太一本、蹈めばぐら〳〵として轉びさう。我戀は細谷川の丸木橋、則ち是である。

が、さかし、薪舟は如何でも好いので、自分で身を殺すだけの勇氣は無

いが、死すべき場合が來れば、其時は平然たるもので、何んとも思はず、死は歸なりといふあんばいに覺悟を極めて居る。

で、少しも此獨木橋を恐れぬ。折節吹颪す山風には、土地の樵夫も柴を捨て這ふといふ、丸木橋の上を、薪舟は平氣で重荷を擔ふた儘、二足三足と歩き出して、眞中まで行くと、果せる哉、風に袂を拂はれる途炭、足蹈滯らして眞逆樣。深い谷川へと陷つた。

下の谷川は深い、それ故に危いと思ふのは水心の無い人の考へで。多少游泳の出來る人には、却つて落ちる時は深い方が好いので、もし淺くて岩や石が出て居やうものなら、それに體を打付けて、飛んだ怪我をする。深ければ沈むばかりで、浮んだ時は最う大丈夫。

薪舟は游泳の道を知らぬ故に、谷川が深くして岩角で體を打碎く事は仕なかつたが、沈んで更に浮く事が出來ぬ。浮いても如何する事も出來ぬ。

正に望み通り死の神は、半薪舟の身に宿つた時に、十津川の谷川の水の

流れは、淵であつてもゆる〳〵とはして居らず。左程長く苦しましめずに、一度沈んだ人を直ぐと淺瀨の岩の根まで持運んで、加之荷物まで其近くの岩に引掛けて助けた。

淵の次ぎは瀨、瀨の次ぎは淵、深いと淺いとが順好く川を仕切つて居るので、却つて深水へ落ちたものゝ方が命が助かるのだ。

薪舟は岩角に縋りついて、水を吐きながら、兎に角陸へ這上らうとは仕たが、それでも腰骨を酷く何處かで打つたと見えて、思ふ樣にならぬ。仕方が無いから、半分水の中で考へ出した。此儘手を放して死ぬと仕やうか。

其十四

考へて居る内に薪舟の五體は寒く冷めたく、氣は何んだか遠く爲つて來た時に、神の下降ましますかと疑はれるばかり、絶壁を蔦かづらに縋つ

てすら〳〵と降來る、白髮白髯白衣に水色の禰宜袴を穿いた老翁の、岩から岩を飛んで更に頭上の岩に移來つて、手に持てる藜の杖を差出した。

これに縋つて上れよといふのであらう。

うつゝ心で薪舟は、水中から杖の先きを握り、それを力に這上ると、忽然として其老翁は消えて仕まつた。扨は神樣だ、矢張神樣が我を助けて彼下つたのだなと思ふ内に、何んだか身軀を宙に釣上げられる樣な心持がして來て、急流も消えて仕まひ、絶壁も消えて仕まつて、何も見えなく爲つて仕まつて、終に薪舟自身も消えて仕まつた樣におぼえられて、其後は知らず。

だが、消えたと思つた自分は、氣絶したのであつて、それが蘇生して見ると、急流も消えて居らぬ絶壁も消えて居らぬ、老翁も亦消えて居らぬ。

赤かし、絶壁を下に見て、急流を其又下に見る處、平地に自分が運ばれて居る事を知つて見ると、老翁が、たしかに此身の氣絶中に、此所まで

連れて來て呉れたといふ事が分るのである。

如何して彼の急な處を、身一個でさへ容易に登れぬのを、老人の力で此身までを運んで呉れたかと思ふと、矢張り神あざの樣にも思はれるのである。薪舟茫として老翁の顏を見て居ると、白髮白髯の人は莞爾と打笑みて「荷物は是だけで御座るか、それから帽子は矢張これで御座らうの」

驚いた、何から何まで持つて來て呉れたのだ。

「實に如何も難有ふ御座いました」と言ひながら立上らうとする薪舟、痛し、其腰、其足。自然と顏を顰めて、よろめくのを、老翁は制して「なにさ、禮には未だ早い。迚も其足で如何する事が出來ませう。さア世話ついでだ、私が脊負ふて行つて上げる、私の家まで御座らッしやれ、直ぐ近い」扨ても奇なる圖、老人に壯者が脊負はれて、平地でもある事か、山坂を登つて行く事。薪舟心苦しくもあれど、如何とも仕難し、親切を

心に謝して連れ行かるゝ儘に委せておくと、近いと言つても十津川山中、半里餘りの其先きは、これは仕たり小門神社。

其十五

左すれば此白髮の老翁は、小門神社の神官、彼の三郎の戀人たる千浪の父、折立平内であつたのか、と薪舟は今更に驚いた。

扨て濡れて居る薪舟の衣服は脫がされて、乾く間にとれでも着てと貸されたのが平内の白衣。幸ひにして荷物の中の塗料顏具、皆鉛封や壜詰の物であつたので、解けて流れる難は遁れて、白紙の寫生帖のみが色を變じたに留つた。

薪舟は平内に助けられたので、平内其人を神の如くに思つて居る。平内は薪舟の助かつたのを、神の御影として居るので。打身の痛む處に、御神水を塗つて呉れたり、御神符で撫て呉れたり。親切は言ふばかり無しだ。

其親切は父ばかりでなく、娘の千浪も甲斐々々しく有つて、やはらかなる敷蒲團、あたゝかき掛蒲團、やはらかなる手、あたゝかき心、何から何まで優しさよ。

さりながら、三郎に疑はれて痛く無い腹を探らるゝも可厭、又愬ひ彼の人に似たる女に戀する者のあるのを見て居るも可厭。それで立去らうとした十津川山中、然るに遇然とはいひながら、助けられて此家に宿る事、益〻三郎をして疑心を長ぜしめるばかりで、又自分も心苦しさを倍すばかりで、此樣な困つた事は無いと考へた。

夫よりも未だ困つた事には、如何やら千浪の……とまで考へた薪舟、千浪其人は兎も角も、政子に似て居る人だけに、優しくされゝば嬉しからぬでも無い。が又此嬉しさの裏には、恐ろしいが含んで居て、彼の三郎が知つて非常に躍起勃起思ひは爲ぬだらうかと考へると、最早や彼の

怒つた顔と彼の愁ふる顔とが眼前に浮んで來る。

これから後、如何なる事があらうとも、我は彼の三郎をして、我の如く失戀の人とは爲せまじと、薪舟連りに考へて居る枕元に、さら〳〵と音さして來たのは千浪。見れば神女の衣裝を着て、一入の美しさ又氣高さ。

それが、しとやかに坐つて手をつかへて「今日は如何で御座います」

「有難ふ御座います。御かけで大分……今日は御父樣は如何かなさいましたか」「はい……用事が御座いましたので、折立村まで參りました」「左樣で御座いますか」

平内の居ぬ時は、此さびしき宮のかたはら、廣き社家の内には、唯二人のみ。

其十六

やさしければ優しき程、眼前の千浪よりも、遠き東の政子の事を思ふ薪

舟。又彼の三郎の苦悶をも思ひ遣りて、岩で打つたる足腰よりも、其方に心を痛めて居るものから、唯二人に爲つたを幸ひに、薪舟は先づ口を開いて「千浪さん、私は貴女に承まはりたい事が有るので御座います」

「あの、妾に……」と千浪は問返へした。

「左樣です、貴女は、彼の私が前に世話になりました家の、三郎さんとは餘程御懇意の樣で御座いますが……いづれ貴女は、晩かれ早かれ、葛城の家へ御越しなさるのでせうねえ」と薪舟は思切つて言つた。

千浪は顔を赤らめもせず、疊の上に突きたる手の先きを、一心に見詰めながら「いゝえ、妾は……」と言ひさして、此時初めて耳朶に茜さしつゝ「妾は、葛城へは參りません」

意外の言葉に薪舟は驚いて「それでは何處へ……」と思はず知らず問ふと、千浪は中々一息には答へ切れず。悶々として居たる末に、幽かなる聲で、何處へと申しまして、妾は……もし參る事が出來ますなら

東京へ……」

此語は一層上の意外であつた「もし、貴女が東京へお出でになりませうものなら、それこそ三郎さんが、どんなに立腹してだか知れないでせう。お止しなさい、それは……東京位つまらない處は有りませんわ」と薪舟は言つた。

「おかし、妾は東京へ參る事が出來ませんかも知れませんが、それでも葛城の家へは最う決して參りません」と千浪は言ふた。

「もし、然うしたら、どんなに三郎さんが、失望してだか知れやァ仕ません。そんな事を言ふものぢやありませんよ。貴女は人前だと思つて、そんな事を仰有るのでせうが、私は何も彼も能く知つて居ます、貴女と三郎さんとの仲は」

「もし御存じならば、それは本の上部ばかりで、眞實妾の心の底は御存じなのでは有りますまい……實を申上げますれば、薪舟樣、妾は

三郎さんから脅迫せられてつらい戀を致して居るので御座います」「えッ、それは又如何いふ譯で……」と聽かうとする處へ、歸來る父の平內。止むを得ず話は其儘、惜しい處で切れた。

其十七

獨木橋から谷川に陷つて打つた薪舟の傷は、日數の經過するに連れて快く爲つて來た。最早や出立しても差支無い樣に成りながら、それが如何いふものか立去らうと言出さぬ。そして禮といふ程の事でも無いが、ほんの寸志までに、小門神社へ油畫の掛額を奉納して行きたいといふので、そろ〳〵手製の木匡をしつらへ、それからカウンバスを張り始めた。イーズル素より間に合せの物。狩野か、四條か、住吉か。既に浮世畫からして見た事の無い折立平內。洋畫の描寫法はどんなであるかと、喜んで其成効を待受けた。

畫くは官女の檜扇を持つての立姿、摸型には千浪をたのみ、紙片で隱す眉毛に、ぼう〳〵眉を引立たしめ、後面之景には是非用ゐたい破れ御簾。パレットにレストスチックの用意有つて、神殿の端を畫室に解くやインヂャンレッド、イタリヤンピンク。一號より二號三號番外までの毛筆を動かすまでに、大概のあたりは鉛筆の力。

其最初に摸型として立つた日は、何故か千浪のぶる〳〵と震ひて、顏色に一定の配合は望まれなかつたが、それでも二日三日と馴れるに從ふて、平氣虛心の域にまで達する事が出來た。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

未だ其畫の半までも至らぬ時、今日一日の摸型を辭して、千浪は用事有り、花尾村まで行く途中、人通りなき林中の細路で、ばッたりと葛城三郎に出會した。

「千浪さん、何處へ行くので……」常ならば笑ひ掛ける三郎の、今日

はにこりとも爲ず睨み付けるやうにして言つた。

「妾は花尾村まで……」と言放つて、千浪も亦にこりとも爲ず、行過ぎやうとする處を、三郎は呼留めて「まア、待つて被下い、千浪さん、少し私は話したい事があるのです」「何か御用ですか」「そんなに他人がましく言なくつても……まア、其處の杉の切株に腰を掛けて被下い……」

仕方なくといふ風情にて千浪は腰を掛けた。しかし申譯に腰を掛けたので、浮足に爲つて居る。

三郎は斧の柄に手を重ねて立ちながら斯う問掛けた「貴女の處へ畫師の薪舟といふ人が居ませう」「は、はい……お出です」「そして毎日貴女と差向ひで神殿の一間に……や、私は見ないから知らぬが、杣の文吉の話だが、それは本統ですか」と問寄つた。